

志士たちの書画

心持傳

志士たちの書画

志士たちの書画

志士たちの書画

志士たちの書画

志士たちの書画

志士たちの書画



志士たちの書画



【会期】平成十年一月十日(土)～三月八日(日)

宮内庁三の丸尚蔵館

## 目次

3	あいさつ
5	図版
31	志士たちの書画―その点描
33	作品解説
42	出品目録
iii	List of Exhibits
ii	Foreword

## 凡例

- 一、本図録は、平成十年一月十日(土)から三月八日(日)までを会期とする展覧会「志士たちの書画」の解説図録である。
- 一、図録の図版及び解説番号は、展示番号と一致する。
- 一、展示期間中、作品の展示替を行う。
- 一、作品解説に記載する法量の単位はcmである。
- 一、本展覧会の企画と図録編集は、三の丸尚蔵館専門員・平林盛得が担当し、同研究員・太田彩が補助した。概説及び作品解説は、平林盛得が執筆した。
- 一、写真は、松野正雄(宮内庁嘱託、コニカ(株))の撮影による。

## あいさつ

江戸時代は、將軍を頂点とした幕府が諸藩に分かれた大名を統制し、各藩がその領民を支配するという幕藩体制をしき、対外的には鎖国によって外国との交渉を絶つ政策をとりました。およそ二百六十年という長きに及ぶ幕藩体制も、その後半の百年にかかる頃から、根幹となる経済的基盤の変動や、その支配体制を脅かす内外のさまざまな事態が起り始め、次第に動乱の幕末に向かつて、慶応三年（一八六七）の大政奉還に至ります。こうした徳川幕府の崩壊が進む時代の中でさまざまな志士たちが輩出し、自己の思想をあらわし、時代の危機を説き、あるいは主義に殉じるなどで活躍しました。

今回の展覧会では、寛政頃（元年—一七八九年）から幕末までの間に視点を置き、必ずしも名筆・名手にかぎらず、勤王の志士をはじめ、藩主や幕臣、公家、学者など、この間に活躍した著名な人びとを選びました。その遺された自筆の書画の作品を通して、彼らの肉声を聞き、その生涯を追想し、今日からそう遠くはない近代直前のこの時代を考えるひとときをお持ちいただければ幸いです。

平成十年一月

宮内庁三の丸尚蔵館

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 出品作品一覧 (第18回 志士たちの書画)

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
1	高山彦九郎喪中歌草稿	高山彦九郎・ (画) 金井鳥洲	一卷	江戸時代 (天明6~8年(1786~88))	p. 5
2	夜間鼠囁画軸因歎	林子平	一幅	江戸時代(天明7年(1787))	p. 6
3	蒲生君平建白書	蒲生君平	一卷	江戸時代(文化4年(1807))	p. 6-7
4	月雪和歌短冊	本居宣長・本居大平	一幅	江戸時代(19世紀)	p. 7
5	待郭公和歌短冊	高野長英	一幅	江戸時代(嘉永3年(1850))	p. 7
6	大日本図	頼山陽	一幅	江戸時代(文政8年(1825))	p. 8-9
7	「推倒一世之智勇」行書	藤田東湖	一幅	江戸時代(19世紀)	p. 9
8	聞桜賦天覧喜為五絶句	佐久間象山	一卷	江戸時代(文久3年頃(1863頃))	p. 8-9
9	徳川斉昭隸書一行書	徳川斉昭	一幅	江戸時代(19世紀)	p. 10
10	夏日同詠二首和歌懐紙	島津斉彬	一幅	江戸時代(19世紀)	p. 10
11	独樂園記	島津久光	一卷	江戸時代(天保9年(1838))	p. 11
12	三条実万像	伝冷泉為恭・ (賛) 三条実万	一幅	江戸時代(19世紀)	p. 12
13	蝦夷途上吟和歌	松浦武四郎	一幅	江戸~明治時代(19世紀)	p. 12
14	火技論	高島秋帆	一幅	江戸時代(文久3年(1863))	p. 13
15	竜図	江川太郎左衛門	一幅	江戸時代(19世紀)	p. 13
16	航于米国艦中賦古詩	勝海舟	一幅	江戸~明治時代(19世紀)	p. 14
17	雪中鷹図	菊池容齋・ (賛) 戸田蓬軒	一幅	江戸時代(19世紀)	p. 15
18	旭日波濤図	岩瀬忠震・ (賛) 林学齋	一幅	江戸時代(万延元年(1860))	p. 15
19	蓮図	永井尚志	一幅	江戸時代(文久2年(1862))	p. 15
20	題太公釣渭図	村田清風	一幅	江戸時代(19世紀)	p. 16
21	題武市君所贈竹図言別	久坂玄瑞	一幅	江戸時代(文久元年(1861))	p. 16
22	山水図(秋景)	武市半平太	一幅	江戸時代(19世紀)	p. 17
23	山水図	武市半平太	一幅	江戸時代(嘉永元年(1848))	p. 17
24	武市半平太自画像	武市半平太	一幅	江戸時代(元治元年頃(1864頃))	p. 18
25	三社和歌短冊	月照	三幅	江戸時代(19世紀)	p. 18
26	梅田雲浜一行書(十蔵宛)	梅田雲浜	一幅	江戸時代(19世紀)	p. 19
27	偶成七言絶句	頼三樹三郎	一幅	江戸時代(19世紀)	p. 19
28	拜闕詩	吉田松陰	一幅	江戸時代(安政3年(1856))	p. 20
29	啓發録	橋本左内	一幅	江戸時代(嘉永元年(1848)) 跋文: 江戸時代(安政4年(1857))	p. 21

30	安島帶刀自画像	安島帶刀	一幅	江戸時代（19世紀）	p. 22
31	藤娘図	宇喜多松庵	一幅	江戸～明治時代（19世紀）	p. 22
32	吉村虎太郎書状（弟妹宛）	吉村虎太郎	一卷	江戸時代（文久3年（1863））	p. 23
33	紙捻製神武必勝論	平野国臣	三冊	江戸時代（文久3年（1863））	p. 24
34	詠錦旗和歌	平野国臣	一幅	江戸時代（19世紀）	p. 25
35	詠宝船和歌	伴林光平	一幅	江戸時代（19世紀）	p. 25
36	坂本竜馬書状（乙大姉宛）	坂本竜馬	一幅	江戸時代（文久3年（1863））	p. 26-27
37	西府幽居偶成	中岡慎太郎	一幅	江戸時代（慶応3年（1867））	p. 28
38	録王守仁詩	高杉晋作	一幅	江戸時代（慶応元年（1865））	p. 28
39	述懐七言絶句扇面	伊藤博文	一幅	江戸～明治時代（19世紀）	p. 29
40	諷世俳句	木戸孝允	一幅	明治時代（19世紀）	p. 29
41	「浴天沸温泉」七言絶句	西郷隆盛	一幅	江戸時代（19世紀）	p. 30
42	述懐和歌	大久保利通	一幅	明治時代（19世紀）	p. 30



巻頭

八月三日、夢に  
 祖母君の見へさせ玉ふ事のあれは  
 覚めて後、夢といふことを句ことに  
 よみ入れて五首歌をよめる

夢のうちには夢とも知らず夢さめて  
 夢と思へと夢も哀しき  
 是も夢か夢にハあらぬか夢か又  
 まことか夢かゆめか誠か  
 夢みても夢とハ棄てし夢さめて  
 夢をそ写し夢の歌よむ  
 夢ならぬ事をも夢そ夢の世と  
 夢になせはや夢になるもの  
 夢も又喪屋に夢みる夢なれば  
 夢も哀れの夢にそ有ける

右五首

正之 哀泣

藤衣きのふけふとは思ひきに  
 いと哀れにもきれかかりける

哀孫 正之 哀泣

きれかかる哀れ涙や藤衣  
 くちはてぬへき身をハおします

正業

おしましと捨てしこの身はかきりなき  
 哀れをつつむ藤のころも手

正之

藤衣いとも哀れそかかる身に  
 落るなミタの玉やつらぬく

（八）月十一日、墓前三十四首。始め第一第三第五の句と藤（衣）よみて十首に至る、十首めよりおきつきをましへよめる事十首、墨染をましへよむ事十首、泪川をよめる事八首、いまた歌はなかはならずして止みぬ、

下の句の下の言葉をとりてよめる 初一

藤衣きのふけふとは思ひきに  
 いと哀れにもきれかかりける

哀孫 正之 哀泣

きれかかる哀れ涙や藤衣  
 くちはてぬへき身をハおします

正業

おしましと捨てしこの身はかきりなき  
 哀れをつつむ藤のころも手

正之

藤衣いとも哀れそかかる身に  
 落るなミタの玉やつらぬく

第1紙

八月三日、夢に  
 祖母君の見へさせ玉ふ事のあれは  
 覚めて後、夢といふことを句ことに  
 よみ入れて五首歌をよめる

夢のうちには夢とも知らず夢さめて  
 夢と思へと夢も哀しき  
 是も夢か夢にハあらぬか夢か又  
 まことか夢かゆめか誠か  
 夢みても夢とハ棄てし夢さめて  
 夢をそ写し夢の歌よむ  
 夢ならぬ事をも夢そ夢の世と  
 夢になせはや夢になるもの  
 夢も又喪屋に夢みる夢なれば  
 夢も哀れの夢にそ有ける

右五首

正之 哀泣

藤衣きのふけふとは思ひきに  
 いと哀れにもきれかかりける

哀孫 正之 哀泣

きれかかる哀れ涙や藤衣  
 くちはてぬへき身をハおします

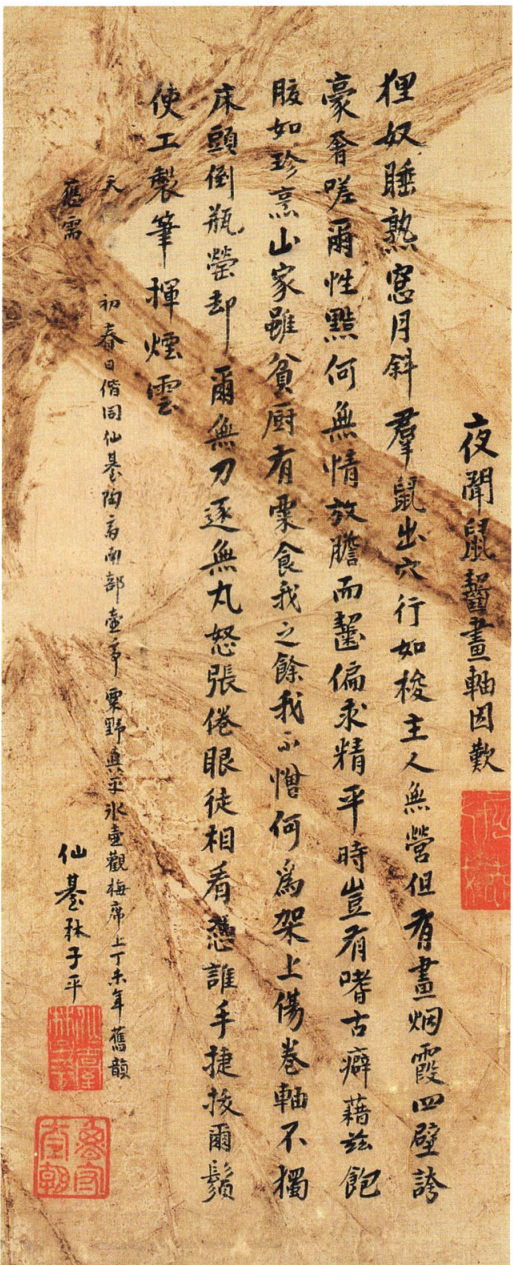
正業

おしましと捨てしこの身はかきりなき  
 哀れをつつむ藤のころも手

正之

藤衣いとも哀れそかかる身に  
 落るなミタの玉やつらぬく

第2紙

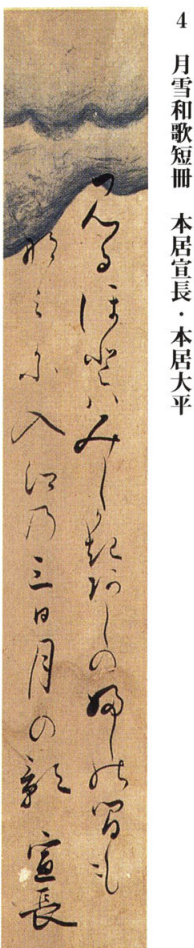


夜間鼠鬻画軸因歎

狸奴睡熟窓月斜、群鼠出穴行如梭、主人無管但有画、烟霞四壁誇  
豪奢、嗟尔性點何無情、放胆而鬻偏求精、平時豈有嗜古癖、藉茲飽  
腹如珍烹、山家雖貧厨有粟、食我之餘我不憎、何為架上傷卷軸、不独  
床頭倒瓶罌、却尔無刀逐無丸、怒張倦眼徒相看、憑誰手捷拔尔鬚、  
使工製筆揮煙雲、

天 初春日偕同仙台陶齋南部壹亭栗野真平水壺觀梅席上丁未年旧韻  
応需 仙台林子平

下野布衣蒲生君平再拜頓首謹上書  
執政吉田從四位閣下蓋聞之一治一亂自古其常然自天地之剖分而神州有天子之受天命焉而臣祚長久無有窮極雖世有盛衰道有汚隆而皇天代佐之宰良相不喪其神容不墜其民命不其國體未嘗有禽獸橫虐人類未嘗有夷蠻戎狄侵寇中土奈之何乃至於今可獨嗚夫魯西亞豺虎之暴於北邊哉是天下忠義慷慨之士人人所以切齒扼腕而憤也自我東照神祖之輔  
王室靖天下之難而置 征夷帥府於江戶率諸侯以鎮海內至於今二百年之治赫赫其於於是方有遠寇國始克克夫然黃賊生在今日孰不蒙其 德澤樂其太平苟有人心而顧之卒其豈致身盡忠以報萬一凡有謀略者何敢以獻民策焉凡有材武者豈以石以建忠功焉凡其有財貨者豈家產以資軍興焉夫然後天下之患可以除撲矣嗚呼自 弘安有蒙古之猖獗西邊五百年之後 今方復有夫魯西亞之暴於北邊夫魯西亞者不猶鑑蒙古嘗溺其水軍十萬沒濟之怒乎 神州固天命之所全福  
宗廟及山川百神百祀祀而天下忠義慷慨之士當而作氣一可以敵百十下忠義慷慨之士當而作氣一可以敵百十可以敵萬民而有一捷當連六支舟直衝穹廬以斬其王督其種而無唯類矣不然  
宗廟及山川百神百祀祀而天下忠義慷慨之士當而作氣一可以敵百十下忠義慷慨之士當而作氣一可以敵百十可以敵萬民而有一捷當連六支舟直衝穹廬以斬其王督其種而無唯類矣不然  
宗廟及山川百神百祀祀而天下忠義慷慨之士當而作氣一可以敵百十下忠義慷慨之士當而作氣一可以敵百十可以敵萬民而有一捷當連六支舟直衝穹廬以斬其王督其種而無唯類矣不然



4 月雪和歌短冊 本居宣長・本居大平

見るほとみしかきあしのふしの間も  
なみに入江の三日月の影 宣長



雪 ふりそむるけふの初雪わかやとに  
梅さくまでハきえずもあらなむ 大平



5 待郭公和歌短冊 高野長英

待郭公 保登、喜須ま川に日数をたち花乃(ほと)きすまつにひかすをたちはなの  
志の婦に本飛越もら須夜も可那 三泊(しのふにほと)をもらすよもかな

管轄通至中兵則色亦漸微而漸散此蓋我之象北虜當時始有閩南志矢距今實三十八年前而後有林子平者慷慨之士也憂此虜竊恃其所著兵談與人言感泣十餘年及年老念空終膺下而上之人莫己知乃上其書求以露之於世其志蓋由此身此代此言而死於刑不憾當殺身以警 朝廷果獲蒙此死後數年而 官家用其言有事故以免又十餘年而有今日之憂島慶之祀堂天一朝一夕之故哉 官家先今日有事於城夷則慶其變也而幽死林子平之宛天下忠義謂之何其官察其變而謝其盡 授之以勳位可以徵慰天下忠義而用其言矣 今如秀夷一介書生性極狂疎於兵何知然竊嘗識天下三弊請獻三策以致慰忠幸其見裁抑則庶乎有微効矣為  
君為 邪敢化萬死不暇自顧謹陳其情不任戰戰惶懼之至  
文化丁卯夏六月蒲生君平頓首謹言

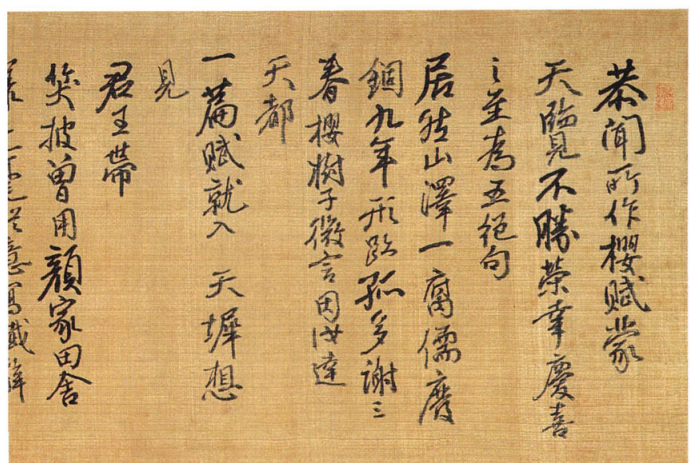
下野布衣蒲生君平再拜頓首、謹上書  
執政吉田從四位閣下蓋聞之一治一亂自古其常然自天地之剖分而神州有天子之受天命焉而臣祚長久無有窮極雖世有盛衰道有汚隆而皇天代佐之宰良相不喪其神容不墜其民命不其國體未嘗有禽獸橫虐人類未嘗有夷蠻戎狄侵寇中土奈之何乃至於今可獨嗚夫魯西亞豺虎之暴於北邊哉是天下忠義慷慨之士人人所以切齒扼腕而憤也自我東照神祖之輔  
王室靖天下之難而置 征夷帥府於江戶率諸侯以鎮海內至於今二百年之治赫赫其於於是方有遠寇國始克克夫然黃賊生在今日孰不蒙其 德澤樂其太平苟有人心而顧之卒其豈致身盡忠以報萬一凡有謀略者何敢以獻民策焉凡有材武者豈以石以建忠功焉凡其有財貨者豈家產以資軍興焉夫然後天下之患可以除撲矣嗚呼自 弘安有蒙古之猖獗西邊五百年之後 今方復有夫魯西亞之暴於北邊夫魯西亞者不猶鑑蒙古嘗溺其水軍十萬沒濟之怒乎 神州固天命之所全福  
宗廟及山川百神百祀祀而天下忠義慷慨之士當而作氣一可以敵百十下忠義慷慨之士當而作氣一可以敵百十可以敵萬民而有一捷當連六支舟直衝穹廬以斬其王督其種而無唯類矣不然  
宗廟及山川百神百祀祀而天下忠義慷慨之士當而作氣一可以敵百十下忠義慷慨之士當而作氣一可以敵百十可以敵萬民而有一捷當連六支舟直衝穹廬以斬其王督其種而無唯類矣不然





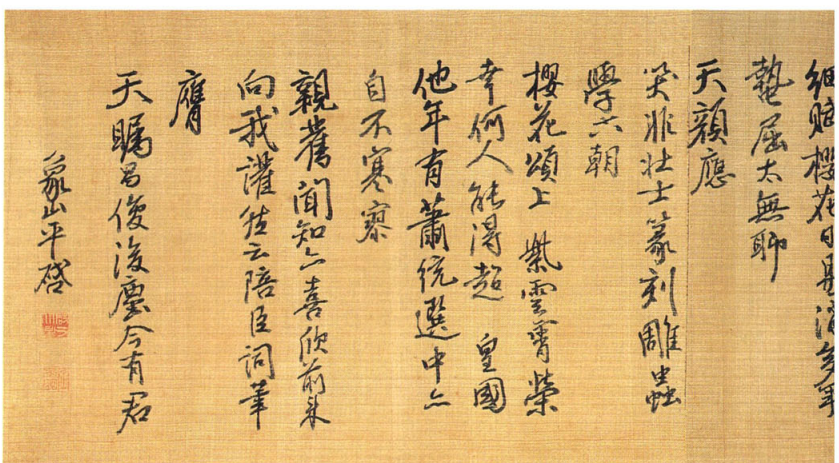
三國志云：倭在島國，形勢未定，專指山河形勢者，則戰爭事跡參觀為難，余為揆臆作此圖，雖國郡方位大半齟齬，而山脈起止、水勢源流，亦是以識概略，而攻守利害又可指掌。

二三年說史之際、不詳其地理、從前輿圖雖備未足、專指山河形勢者、則戰爭事跡參觀為難、余為揆臆作此圖、雖國郡方位大半齟齬、而山脈起止、水勢源流、亦是以識概略、而攻守利害又可指掌、  
乙酉孟秋十二日  
山陽外史



8 聞櫻賦天覽喜為五絕句 佐久間象山

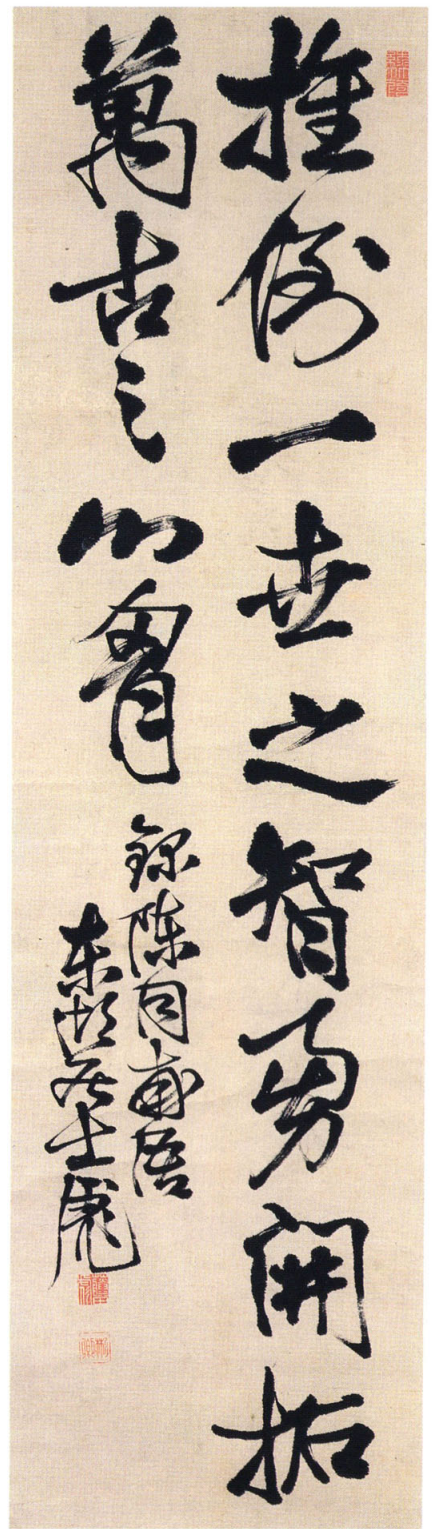
恭聞所作櫻賦蒙天覽、不勝榮幸慶喜之至、為五絕句、  
居然山沢一腐儒、廢錮九年形跡孤、多謝三春櫻樹子、微言因汝達天都、  
一篇賦就入天墀、想見君王帶笑披、曾用顏家田舍樣、秃毫隨意寫纖辭、



細賦櫻花日易消、多年斃屈太無聊、  
天願應笑非壯士、篆刻雕蟲學六朝、  
櫻花頌上紫雲霄、榮幸何人能得超、  
皇國他年有蕭統、選中亦自不寒寥、  
親舊聞知亦喜欣、前來向我譁然云、陪臣詞筆膺  
天賜、昌俊後塵今有君、  
象山平啓



7 「推倒一世之智勇」行書 藤田東湖



推倒一世之智勇、開拓萬古之心胸、  
蘇轍句、東湖居士題



近者説遠者来

10 夏日同詠二首和歌懐紙 島津斉彬



夏日同詠二首和歌

左近衛権中将源齐彬

連日  
五月雨

けふいく日はれ間も見えぬ  
さみたれに淀の川瀬を  
越そわつらふ

湖邊  
一釣舟

一葉ちるおもかけ見せて  
さゝなみやにほのうみ辺に  
うかふ釣ふね

夏日同詠二首和歌

左近衛権中将源齐彬

連日  
五月雨

けふいく日はれ間も見えぬ  
さみたれに淀の川瀬を  
越そわつらふ

湖邊  
一釣舟

一葉ちるおもかけ見せて  
さゝなみやにほのうみ辺に  
うかふ釣ふね

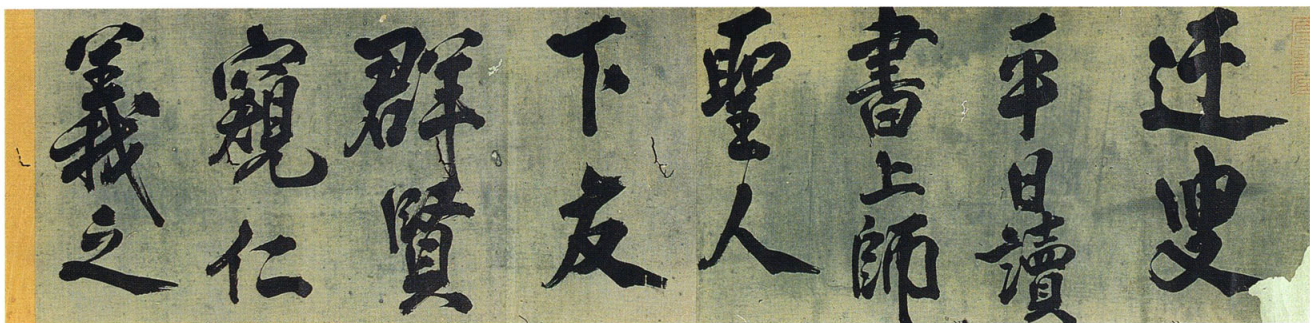


図1 (卷首)



図2 (部分)

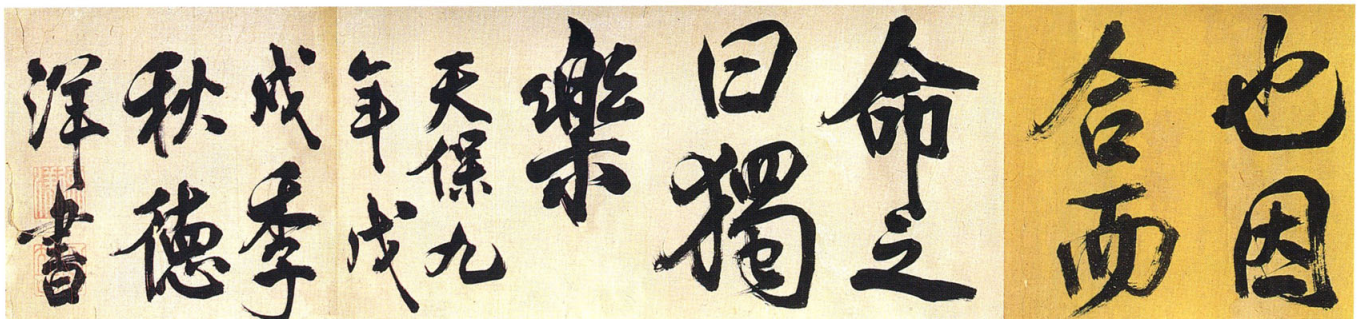


図3 (卷末)

迂叟「平日読書、上師」聖人、  
 下友「群賢」、窺仁「義之」原、  
 探「礼楽」之緒、「自未」始有「  
 形之前」既四「達無」窮之「  
 外、事」物之「理、拳」集目「  
 前、可」者学「之、未」至夫「  
 可、何」求於「人、何」待於「  
 外哉、」志倦「体疲、」則投「竿  
 取」魚、執「枉采」葉決「渠灌」  
 花、操斧「剖竹」、濯熱「鹽水、」  
 臨高縱「目、逍遙」徜徉、「惟意」  
 所適、「明月」時至、「清風」自  
 来、「行無」所牽、「止無」所「泥、  
 耳」目肺「腸、卷」為己「有、  
 踴々」焉、洋「々々焉、」不知「天  
 壤」之間、「復有」拈何樂「可以」  
 代此「也、因」合而「命之」曰  
 獨「楽、」  
 天保九「年戊」戌季「秋、德」洋書



佐免よ登て  
曉ことう徒鉦  
の

遠き夢路  
に  
起こえわたら  
ん

実万贊



蝦夷途上吟  
帰り来る鷺のねくらにまとふらむ  
磯の巖ほは我かり寝せり  
弘

五兵之中惟火最烈古今水陸  
 之戰以火成攻者最多兵濟云  
 以火佐攻者明也是火器之利  
 於戰陣久矣

癸亥晚春  
 七秩老人高秋帆

五兵之中惟火最烈、古今水陸  
 之戰以火成攻者最多、兵法云、  
 以火佐攻者明也、是火器之利  
 於戰陣久矣、  
 癸亥晚春  
 七秩老人高秋帆



君不聞火船雄飛數万里，宇宙雖咫尺裏，飄拳長驅  
 入蒼茫，恍然恰如遊海市，車輪轉濤鯤尾動，高帆飄風鵬翼  
 起，南極沈沈初月輝，冰山巒々連天峙，俯推海國仰窺天，形象  
 歷々掌上視，無數島嶼翠一痕，翠裏包含幾洲里，一自宇內  
 掃掌摩，竟恣吞噉碧眼士，嗚呼人世局促何足恃，小信大疑錯  
 非是，既將功名附雲波，向誰更說海軍技，安得遠識如伯氏，  
 大令天下定基趾，  
 海舟居士

君不聞火船雄飛數万里，宇宙雖咫尺裏，飄拳長驅  
 入蒼茫，恍然恰如遊海市，車輪轉濤鯤尾動，高帆飄風鵬翼  
 起，南極沈沈初月輝，冰山巒々連天峙，俯推海國仰窺天，形象  
 歷々掌上視，無數島嶼翠一痕，翠裏包含幾洲里，一自宇內  
 掃掌摩，竟恣吞噉碧眼士，嗚呼人世局促何足恃，小信大疑錯  
 非是，既將功名附雲波，向誰更說海軍技，安得遠識如伯氏，  
 大令天下定基趾，  
 海舟居士

17 雪中鷹図 菊池容斎・(賛)戸田蓬軒



蒼鷹のよあけて  
はなつぬくめとり  
人は なさけを しらぬ  
ものは

蓬軒書

19 蓮図 永井尚志



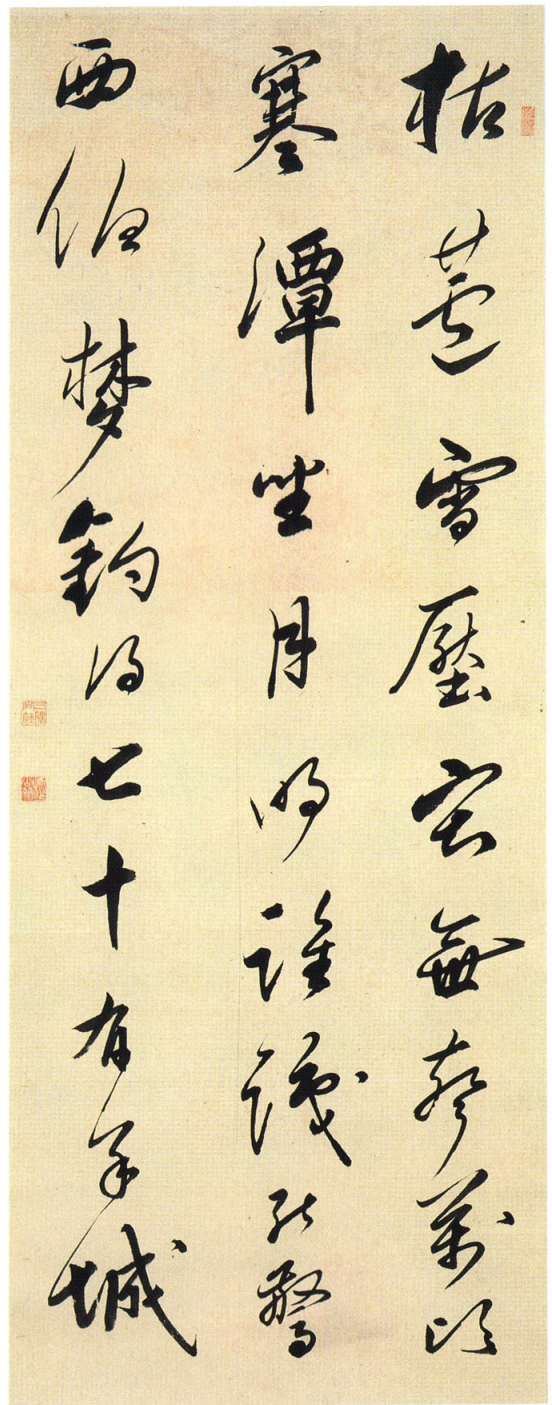
晚香風共遠、  
簾影露拌鮮、  
壬戌秋七月初幹 介堂醉墨

18 旭日波濤図 岩瀬忠震・(賛)林学斎

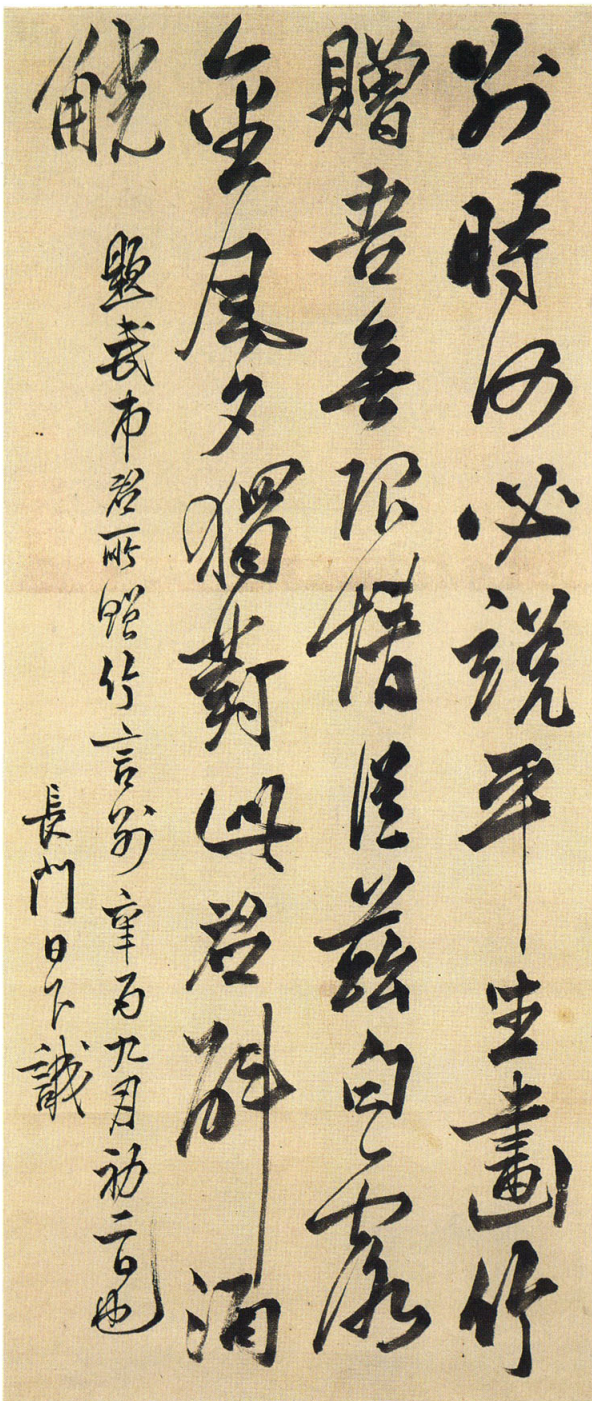


海旭初生於未高、  
雲烟四散湧金濤、  
一年三百六十日、  
此觀朝々能幾遭、  
右先考詩 林昇録

庚申春首写  
鳴所震



枯蘆雪壓寂無聲、萬頃  
寒潭坐月明、誰識能驚  
西伯夢、釣得七十有子城、



別時何必說平生、畫竹  
贈吾無限情、從茲白露  
金風夕、獨對此君酌酒  
觥、

題武市君所贈竹園言別 辛酉九月初二日也  
長門日下識



22 山水图(秋景) 武市半平太



秋山暮霭  
小楯

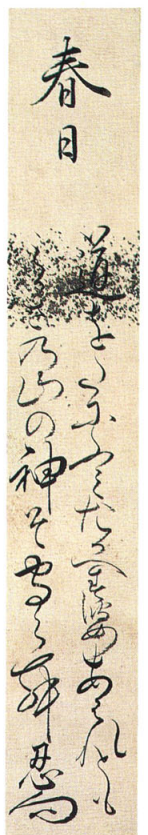
23 山水图 武市半平太



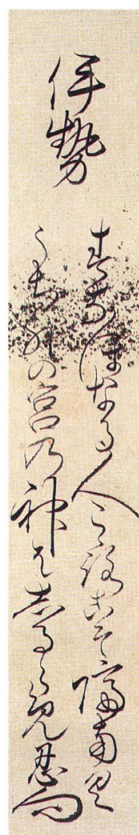
嘉永元年冬日  
茗小礪



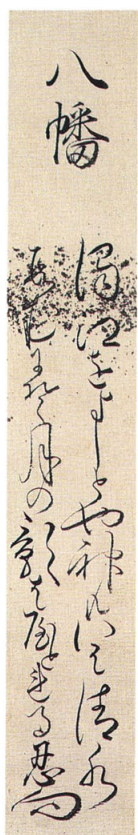
燕雀得時擅、蒼鷹  
向暗眠、如何幽獄裏、  
慷慨只呼天、 茗小圃



春日  
道をたにふみたかへす婆あはれとも  
みかさの山の神そ守ら舞 忍向



伊勢  
すなほなる人こゝ路こそ隔なく  
うち外の宮の神そしるらめ 忍向



八幡  
濁江をよしとや神もいは清水  
すむにそ月の影はやとれる 忍向

寧死猶聞挾骨香  
付十歲 雲浜

寧死猶聞挾骨香  
付十歲 雲浜

萬株楓葉疊秋霞，下有溪流  
一道斜。最是初陽射林隙，紅雲  
堆裏擊聖蛇。  
三樹醉醇

萬株楓葉疊秋霞、下有溪流  
一道斜、最是初陽射林隙、紅雲  
堆裏擊聖蛇、  
三樹醉醇

山河襟帶自然城東來無不日憶 神系今朝盥嗽拜 鳳闕野人無泣  
 不能行 上林零落非復昔空有山河望更聞說 今皇聖明德  
 敬天憐民發至誠鷄鳴乃起親齋戒祈掃妖氛致太平 英皇不  
 世出悠々共機令公卿安得 天詔勅六師生使 皇威被八紘人  
 生若萍無定在何日重拜 天日明

右癸丑十月朔旦奉拜 鳳闕肅然賦之時余將西走入海

丙辰季夏

二十一回藤寅手錄



山河襟帶自然城、東來無不日憶 神京、今朝盥嗽拜 鳳闕、野人悲泣  
 不能行、 上林零落非復昔、空有山河無變更、聞說 今皇聖明德  
 敬天憐民發至誠、鷄鳴乃起親齋戒、祈掃妖氛致太平、從來 英皇不  
 世出、悠々失機今公卿、安得 天詔勅六師、坐使 皇威被八紘、人  
 生若萍無定在、何日重拜 天日明、

右癸丑十月朔旦、奉拜 鳳闕肅然賦之、時余將西走入海、

丙辰季夏

二十一回藤寅手錄



30 安島帶刀自画像 安島帶刀



31 藤娘図 宇喜多松庵



一筆致啓上候、然者  
御引弘之砌より、御病症御様取  
追々御快方ニ御移被遊候所、又々  
御差重り、終ニ今八日御逝去之  
趣、宇賀伯父上様ニ新堀吉村より之  
為御知、今廿二日相達奉驚入候、  
誠ニ去年来只々御苦心而已  
相懸々、少も御補養之筋ハ不仕、不  
孝不遇之候得共、兼々申談候通、  
忠孝両全ハ不相調、仍而御大切之  
御病症を見捨出国致し、乍不及  
微忠を  
天朝ニ奉尽居候中、幕府之  
姦吏共  
朝廷を軽蔑し違勅之事  
共多く、  
朝廷正義之御方々様日夜御苦  
心被遊、就中 姉小路様ニハ  
朝廷第一之御方様ニ而、此方共、  
実ニ君之如クニ存、日夜参殿  
仕御議論申上、  
聖旨貫徹致候様御尽力被遊  
居候中、今十九日一橋公より別紙  
之通不安届参着、  
朝議紛々タル事ニ候所、豈謀ん  
今廿一日夜四ッ時過 姉小路様  
御所より御退殿之御場合、朔平門  
外ニ於て逆賊三人斬懸々、初刀

藩手ニ候得共、御タユミ無之言人  
之刀御奪取被遊候得共、御家来  
共逝去、言人残リ戦之躰ニ而、終ニ  
三四ヶ所御深手、其夜九ッ時過  
御落命、此方も翌廿二日晩参殿、  
委細承り落涙時を移し居候中、  
諸藩有志士相集、万事議し  
帰宅之所、  
父上様御左右到着、進退茲ニ  
極り、八ッ時頃迄ハ何事も不弁、  
悲嘆ニ而己打伏し居候所、能々  
相考候ニ、忠を立ル志より、孝捨テ  
上京いたし居候上、如斯危急存  
亡之秋ニ当り、手を空しく致し  
居候而ハ、却而 黄泉ニ於るて  
父上様江申上様無之訳と存、竊ニ  
微忠を尽居申候、  
母上様より帰国いたし候様之思百、  
承知仕候得共、右都合無據婦  
国相調不申、不孝重候段幾重ニも  
御断御申上可被下候、大暑之砌、  
母上様御病氣等御引起無之  
様御慰申上可申、此度ハ  
母上様へ御書状差上不申、宜御断  
可被下候、御飛帛立懸ケ之由、  
大取急右筆留書外後より  
可申述候、以上、  
五月廿五日  
久万弥殿  
阿明との  
虎太郎



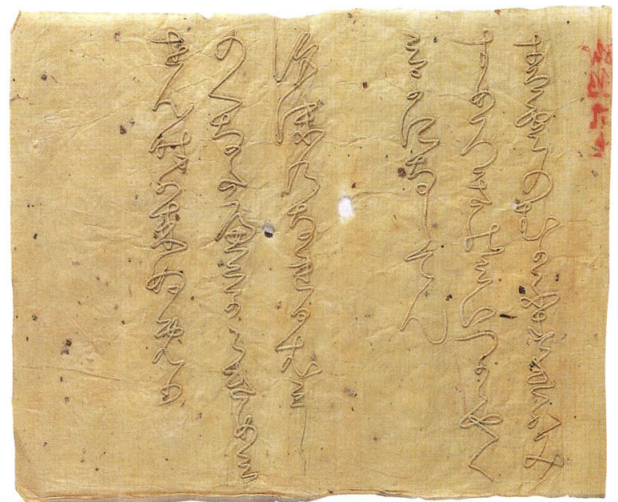
神武必勝論 上

必勝論

夫動兵八国の大事にして、死生存亡に關る、固より輕拳すへからず、知彼知己、五事七計を以て校之、預め勝負を廟算に見て間を用ゐ、機を探り、△(以下付箋) 因勢制利正を以て戦ひ、奇を以て勝つ、是

△(付箋部)

十二方略を旋し、敵をして常に焼屋の下に立、漏船の中に坐するか如くならしめ、我をして同船して、風に遇ひ高きに登て梯を去るか如くし、或ハ迅雷烈風の勢を以て九天の上に動き、或ハ山林静徐の氣を取めて九地の下に隠れ、千變万化し、



神武必勝論 中(部分)

青雲のむこうすきハミ  
すめろきのみいつか、やく  
みよになしてん  
汐沫のなれるえみし  
のくなたへにからきめみ  
せん時ハ来ぬめり

神武必勝論 下(部分)

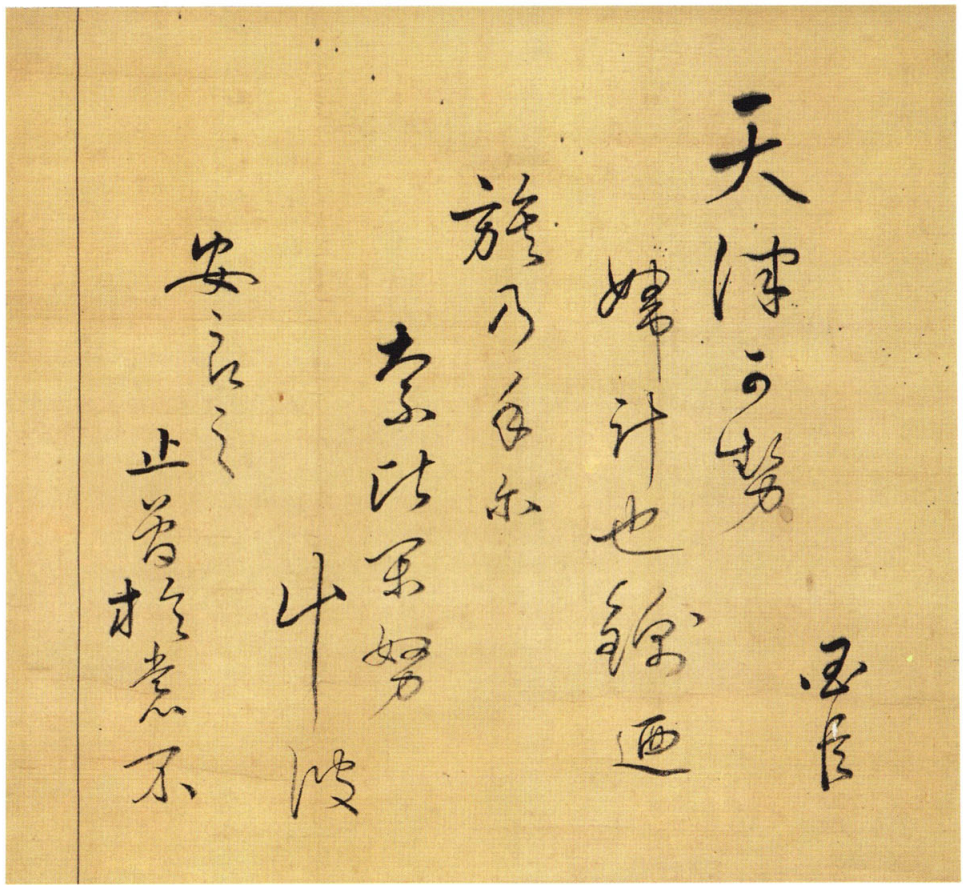
軍費ヲ助け兵糧ヲ償ひなハ、  
必勝の英策ハ極て凡慮の測  
知へからざる、宏遠恢濶たる、  
聖明の神武より輝き出んこと、  
欽んで疑ふへからず、  
文久三年上巳稿成

平野二郎国臣

わき出る心の底ハあさくとも  
いはまのしみつ汲む人もかな







国臣

天津可勢

婦計也錦廻

旗乃手尔

奈比閑努

艸波

安良之

止曾於裳不

(あまつかせ)

(ふけや錦の)

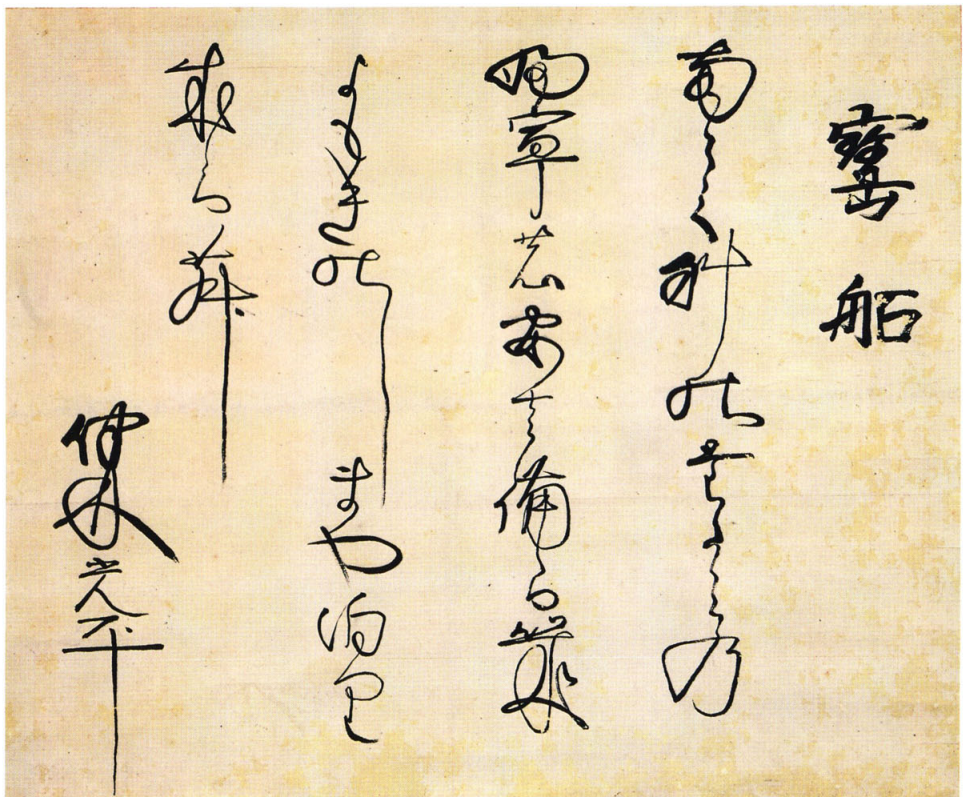
(旗の手に)

(なひかぬ)

(草は)

(あらし)

(とそおもふ)



宝船

南々斜の堂から乃 (ななくさのたからの)

婦寧農安さ備ら幾 (ふねのあさひらき)

来ら舞 (よもぎのしまや泊里 (よもぎのしまよとまり) くるらむ)

伴林光平

此頃ハ天下無二の軍学  
者勝麟太郎と云  
大先生に門人とありしもの  
外には、はかられし先生  
きやくふんのよふなものに  
なり申候、ちかきうちには、  
大坂より十里あまりの地にて、  
兵庫という所にておゝきに  
海軍ををしへ候所を  
こしらへ、又四十間五十間  
もある船をこしらへ、  
でしども二も四五百人  
も諸方よりあつまり  
候事、私初栄太郎  
なども其海軍所  
に稽古学問いたし、  
時々船乗のけいこもいたし、  
けいこ船の蒸気船  
をもつて、近々のうち  
土佐の方へも参り申候、  
そのせつ御見にかゝり可申候、  
私の存し付ハ、このせつ  
兄上にもおゝきに御どふい  
なされ、それわおもしろい、

此頃ハ天下無二の軍学  
者勝麟太郎という  
大先生に門人となり、ことの  
外かはいかられ候て、先  
きやくふんのよふなものに  
なり申候、ちかきうちにハ、  
大坂より十里あまりの地にて、  
兵庫という所にておゝきに  
海軍ををしへ候所を  
こしらへ、又四十間五十間  
もある船をこしらへ、  
でしども二も四五百人  
も諸方よりあつまり  
候事、私初栄太郎  
なども其海軍所  
に稽古学問いたし、  
時々船乗のけいこもいたし、  
けいこ船の蒸気船  
をもつて、近々のうち  
土佐の方へも参り申候、  
そのせつ御見にかゝり可申候、  
私の存し付ハ、このせつ  
兄上にもおゝきに御どふい  
なされ、それわおもしろい、

やれくと御もふし  
のつかふにて候あいた、  
いせんももふし候とふ  
り、軍でもはしまり候時ハ、  
夫までの命、ことし命  
あれハ、私四十歳に  
なり候を、むかしい、し  
事を御引合なさ  
れたまへ、すこしエヘン  
二かをしてひそかにおり申候、  
達人の見るまなこハ  
おそろしきものとや、  
つれく二もこれあり、  
猶エヘンエヘン  
かしこ  
五月  
十七日 竜馬  
乙大姉御本  
右の事ハ、まつく  
あいたからへもすこしも  
いうてハ、見込のちかう  
人あるからハ、をひとり  
にて御聞しおき、  
かしこ

やれくと御もふし  
のつかふにて候あいた、  
いせんももふし候とふ  
り、軍でもはしまり候時ハ、  
夫までの命、ことし命  
あれハ、私四十歳に  
なり候を、むかしい、し  
事を御引合なさ  
れたまへ、すこしエヘン  
二かをしてひそかにおり申候、  
達人の見るまなこハ  
おそろしきものとや、  
つれく二もこれあり、  
猶エヘンエヘン  
かしこ  
五月  
十七日 竜馬  
乙大姉御本  
右の事ハ、まつく  
あいたからへもすこしも  
いうてハ、見込のちかう  
人あるからハ、をひとり  
にて御聞しおき、  
かしこ

遮莫俗埃盈四隣，虛心却又見情真。  
 何心憑此神皇道，直使萬邦無片塵。

予隨五公卿於太宰府幽居時俗塵盈四隣，歌舞遍街衢，予獨顏自靜，閑偶有之作。

汪山生

遮莫俗埃盈四隣、虛心却又見情真、  
 何心憑此神皇道、直使萬邦無片塵、

予隨五公卿於太宰府幽居時、俗塵盈四隣、歌舞遍街衢、予獨顏自靜、閑偶有之作、

四十餘年一睡夢中而今醒眼  
 始朦朧不知日已過亭午起向高樓  
 撞曉鐘

田中君暉錄  
 王守仁詩

東狂生

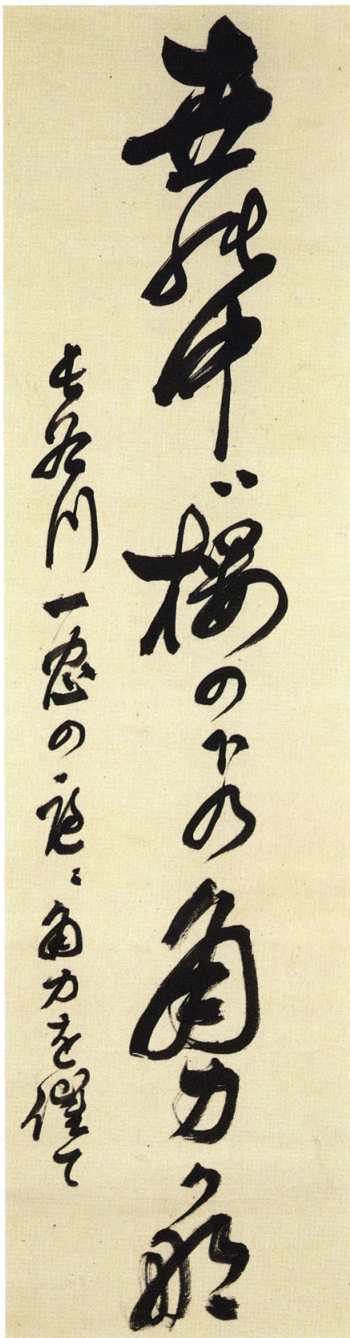
四十余年睡夢中、而今醒眼  
 始朦朧、不知日已過亭午、起向高樓撞曉鐘、

田中君暉錄  
 王守仁詩  
 東狂生

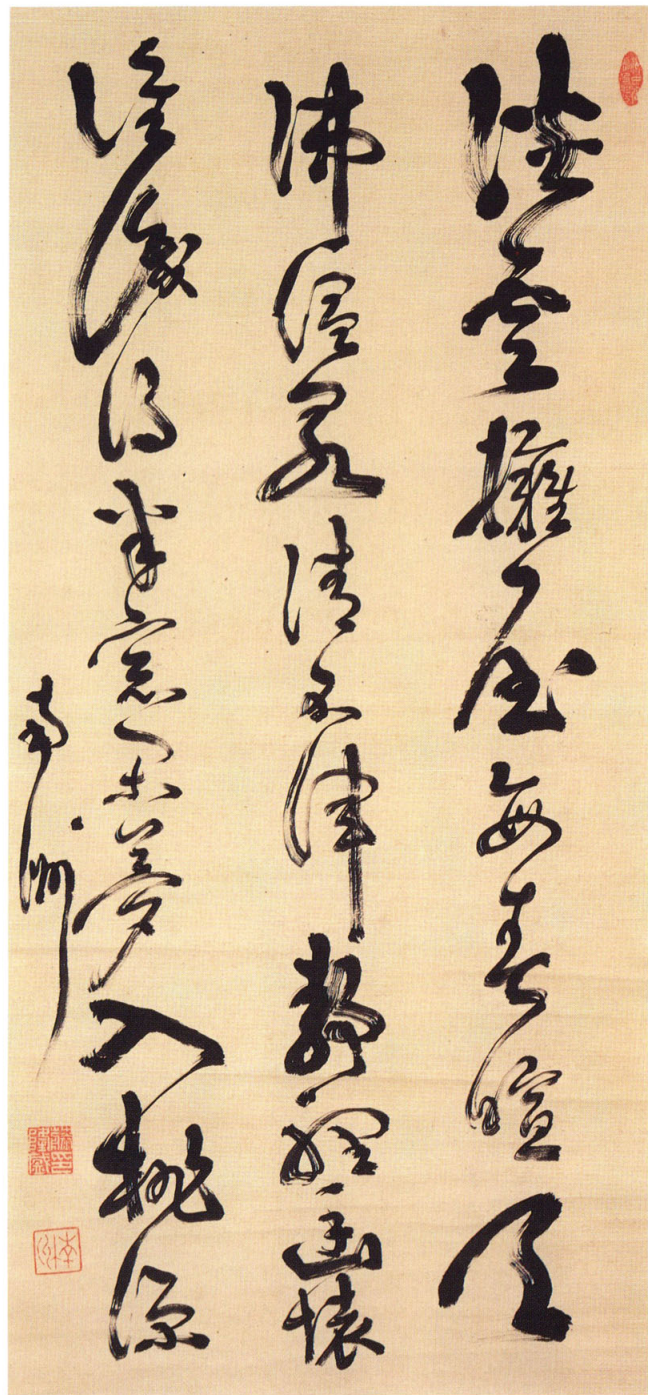


撫枕沈吟夜不睡、傷時憂世淚如流、一聲杜宇三更、月、層得此身愁又愁、錄近作、春畝生

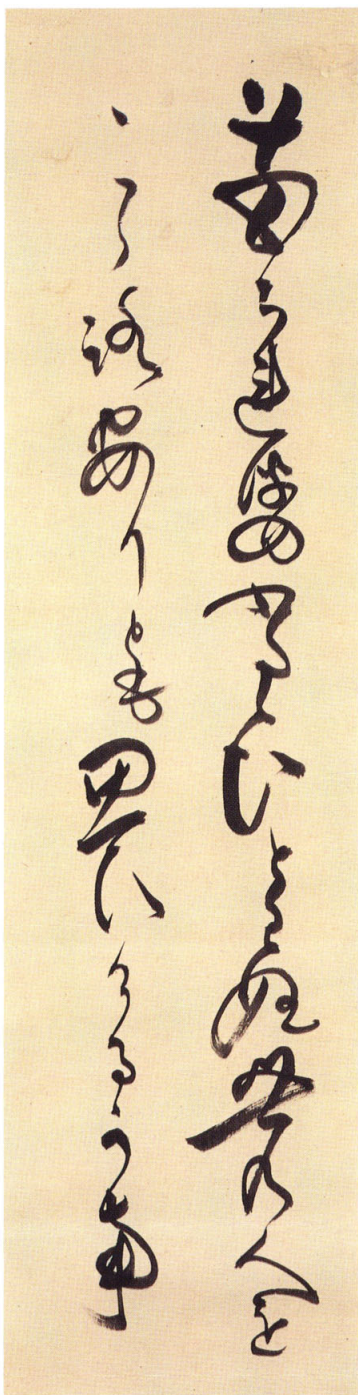
40 諷世俳句 木戸孝允



世の中八桜の下の角力か那  
長谷川一忠の庭、角力を催す



淡雲擁屋每春暄、天  
沸温泉清不渾、静裡幽懷  
誰識得、半窓閑夢入桃源、  
南洲



花ち連婆ふたゝひとわぬ世の人を  
こゝ路ありとも思ひけるか南

## 志士たちの書画——その点描

はじめに寛政の三奇人と呼ばれた人たち——高山彦九郎・林子平・蒲生君平——がいる。寛政五年（一七九三）六月二十七日、高山彦九郎は幕吏に襲われて、九州久留米の地で自刃する。年四十七歳。その六日前に仙台で林子平が禁固中の身で病死する。年五十六歳であつた。彦九郎は自己の祖先が南朝の新田義貞につながることから勤王思想の鼓吹につとめ、公卿の門に出入し、全国著名な人士と交わり、その強烈な言行もあつて幕府の取締りを受けた。祖母の墓のかたわらに三年の服喪というのも孝行心の発露とはいえ、常人のなせる業ではない。その哀悼歌集の草稿（展示番号1）はわずかに残つた原本である。一方の林子平は、その説く海防論が鎖国を固守しようとする幕府にとつて人心を惑わすものでしかなかった。六無齋と自嘲する諧謔性の一面に通ずるものとして自作の七言古詩（展示2）がある。二人よりやや後輩の蒲生君平は、子平の没後十四年、建白書（展示3）を老中に提出し、北辺の防備の重要性を論じ、また堂々と子平の名譽回復を請願し、この問題が単に人心を惑わす類のものでなくなっていることを示している。また彦九郎の行業を慕い、陵墓の荒廢を嘆き『山陵志』を著し、本居宣長の批評を求めている。

学者たちをみよう。『古事記伝』を完成した宣長は冷泉門の歌人でもあり、その歌道を継いだ養子大平とともに和歌短冊（展示4）がある。儒仏を排して日本古来の道に帰れと説く国学は、宣長の考えをこえて平田篤胤をとおして幕末尊王攘夷論の柱となつてゆくことになる。儒者頼山陽の著した史書『日本外史』『日本政記』などもまた志士たちの共感を呼んだものであるが、史書著述の副産物として読史地図（展示6）があるのは興味深い。藤田東湖は水戸藩の儒者、藩主徳川斉昭を助けて藩政改革に尽くしたが不運にも震災に遭い逝去する。その気概を示す愛唱の一句（展示7）。佐久間象山は松代藩の儒者、アヘン戦争の情報を知つて西洋兵学や蘭学を学び、公武合体・開国進取説をとつて諸方を遊説し、尊王攘夷派に暗殺される。優れた漢詩人であつた彼は、自作が叔聞に達したことを知つて作つた七言絶句（展示8）がある。また蘭学者高野長英は畜社の会の渡辺崋山らと交わり、西洋の知識を吸収したが幕政批判者として投獄され、脱獄、追われて自殺する。逃亡中の手跡・和歌（展示5）を遺す。

幕藩体制の主要な構成員である藩主も、藩内の保守と革新の対立を抱えながら幕政に参加し、幕末への時代の動きのなかで主要な軸となっている。薩摩藩の開明派の藩主島津斉彬に和歌懐紙（展示10）、その急死のあとをうけて公武合体をとなえた異母弟久光に中国古典の揮毫（展示11）、水戸藩主徳川斉昭は藩内改革に対する保守派の反撃うけ、また幕府に攘夷を進言するなどして再度処罰され、井伊大老と対立するが、その斉昭に『論語』の一句の揮毫（展示9）がある。藩主の古典に対する教養や治世に対する自戒の語などを窺うことができる。公家としては内大臣三条実方（尊王攘夷急進派）のものがある。冷泉為恭筆と伝える像（展示12）で、実方自筆の和歌を付している。攘夷派の公家として、佐幕派の関白九条尚忠と対立、井伊大老の施策に反対し、追捕を恐れて出家し、その年に没するから最晩年の実方の筆跡と風姿である。

鎖国時代の長崎は情報や新知識の流入口であつた。幕府が人心を惑わすものとして林子平を処罰した寛政四年（一七九二）からほぼ半世紀あと長崎で北方問題の急迫していることを聞き、弘化二年（一八四五）を始めとして都合六度、蝦夷（北海道・サハリン・千島）を探索したのが松浦武四郎であつた。その折り焼け炭で書きつけた詠歌の一首が清書され（展示13）て遺されている。また西洋砲術を和蘭人から学びおおくの門人に教え、幕府の軍事近代化に寄与したのは、長崎の町年寄の三男高島秋帆であつた。秋帆は銃砲の威力を高らかに述べている（展示14）。

幕府が崩壊に向かつて傾いて行く中で、幕臣たちも懸命に行動している。秋帆の弟子、幕臣江川太郎左衛門は黒船来航にあたり品川砲台や反射炉の築造など幕府の海防の強化に努めているが、谷文晁に弟子入りして画技に長じていたことも世に知られており、そのうちの一点、水墨の竜図（展示15）である。旗本勝海舟は、江戸城無血開城や条約批准使節にしたがつて咸臨丸による太平洋横断で知られているが、その出航直前の気概に満ちた七言古詩（展示16）がある。そしてまさにその年の元旦の波濤を分けて生まれだした旭日を描いている（展示18）のは、攘夷断行の嵐の中で条約を締結した岩瀬忠震である。忠震の親友とともに外交交渉にあつた永井尚志にも夕暮れに咲く蓮の図（展示19）があり、激動の時代に背を向けて、ひたすら古典の絵画の修得に努めた幕臣の画家菊池容斎の作品（展示17）もある。

中国古代の智将太公望の図によせて詩作（展示20）している村田清風は萩長州藩士、民政・財政の建て直しや海防につくし、藩内の天保改革をすすめたが反対派によつて挫折、その志は周布政之助らに受け継がれる。時局を論じ

ての別離にあたって贈られた竹凶にたいし、答礼の七言絶句(展示21)を詠んでいるのは萩藩士久坂玄瑞、吉田松陰門下の秀才で禁門の変で自刃する。竹凶を贈った武市半平太は土佐藩勤王党首領、余技として南画・日本画を習い、世に多くの遺品を残している。当館には南画風の山水画二点(展示22・3)と自画像(展示24)がある。とくに自画像は囚獄中のもの。半平太は公武合体・尊王攘夷で藩論を統一して時局にあたるうとしたが、藩の重臣で佐幕派の吉田東洋を暗殺した咎で切腹させられる。

幕末とは嘉永六年(一八五三)ペリー来航から大政奉還までの十五年間をいう。その中で勤王の志士たちの最大の受難は大老井伊直弼による批判派の弾圧、安政の大獄(一八五八―九)である。伊勢・石清水・春日の三社を詠んだ和歌(展示25)を残した月照は京清水寺僧、追求厳しく薩摩まで逃れたが、西郷隆盛と入水して命を絶った。見知りの従僕に愛唱の一句(展示26)を書き与えた梅田雲浜は小浜藩士、逮捕者の第一号で獄中で病死する。頼山陽の息三樹三郎も犠牲となった。「反逆之四天王」とされ斬首刑で、遺骸は小塚原にすてられた。紅葉の樹林と溪流を爽やかに詠ずる七言絶句(展示27)が残る。吉田松陰の漢詩は、長崎に来航したロシア艦によって密航しようとして途中京の御所を拝した時の詩をもとに推敲したもの(展示28)。松陰の取り調べは梅田雲浜との関係を訊かれたものであったが、老中暗殺計画などを進んで自供したため処断された。『啓発録』(展示29)は福井藩士橋本左内が十五歳のときに書いた原本で、この書を十年のちに発見し自ら跋文を加えている貴重なもの。藩主松平慶永の側近として仕え、將軍継嗣問題や条約勅許問題で奔走、直弼失脚を画策して捕らえられ刑死する。年二十六歳。自画像(展示30)を伝える安島帯刀は水戸藩家老、条約違勅調印について水戸藩に密勅が下された廉で切腹させられる。京の画家宇喜多松庵は父一とともに勤王攘夷運動に努め父子ともに投獄され、父は病死し、松庵は所払いに処せられる。松庵の遺品として藤娘図(展示31)がある。この他すでにふれた公家三条実万(出家)、水戸藩主徳川斉昭(永塾居)、幕臣岩瀬忠震(永塾居)・永井尚志(免職)なども大獄の連座者である。

土佐藩庄屋で脱藩して天誅組の変(一八六三)を起こし敗死する吉村虎太郎が、弟妹に送った書状(展示32)は、忠孝の狭間で悩む姿や攘夷派公家の暗殺を生々しく伝える。同じく天誅組に加わって獄死した河内の還俗僧・歌人の伴林光平に新春の祝儀の和歌(展示35)がある。また福岡藩脱藩浪士で、生野の変(一八六三)を起して投獄され処刑される平野国臣が遺した、紙捻(こより)

を墨の代わりとして表現した著作(展示33)は他に類をみない遺品である。なお国臣自筆の和歌(展示34)と対比するのも興味深い。

幕末の志士のうちで最も著名な人物のひとり坂本竜馬の書状(展示36)は姉の乙女に宛てたもので、勝海舟の海軍操練所設立にかんする消息を伝えている。竜馬の盟友で、同じ土佐脱藩浪士中岡慎太郎の詩句(展示37)は八方塞がりの現状を打破しようとする気鋭があふれている。激流押し寄せる長州藩にあつて縦横に活躍した高杉晋作が近侍する田中光頭に与えた王陽明の詩(展示38)には自戒があふれている。晋作の下で働く伊藤博文(俊輔)自作の詩を染筆した扇面(展示39)には苦渋の思いが満ちている。

花見の相撲に勝者・敗者を譬えた俳句の木戸孝允(展示40)、陶然と桃源郷に遊ぶ詩の西郷隆盛(展示41)、花見を風流人とする世情への慨嘆の和歌の大久保利通(展示42)と、維新の三傑はそれぞれの姿を垣間みせている。

展示品は、その子孫や関係者から明治天皇に献上されたものもあるが、その多くは昭和三年田中光頭から献上されたものである。該当各項に注記したが、ここでは献上者田中光頭の略歴についてふれておきたい。光頭は天保十四年(一八四三)に生まれ、昭和十四年(一九三九)に没した。享年九十七歳。出身は土佐・高岡郡佐川村郷士、はじめ浜田辰弥、ついで田中謙、のち光頭と改める。号を青山という。武市半平太の土佐勤王党に加わり、上洛して尊王攘夷運動に働いたが、文久三年(一八六三)八月十八日の政変の波及によって塾居謹慎となる。元治元年(一八六四)長州藩の倒幕運動を支援するため脱藩、第二次長州征討の幕軍と戦う。中岡慎太郎に従い、その死後陸援隊を率いる。維新後新政府に出仕、岩倉使節団に随行し欧米を視察、西南戦争に従軍、警視總監・学習院長など要職を経て、明治三十一年(一八九八)から同四十二年まで宮内大臣を勤めた。大臣在任中、正倉院宝物の拝観・写真撮影、東山御文庫の典籍の謄写など学者に調査研究の途を開いた。引退後、顧みられなくなった維新の志士たちの遺墨の蒐集を行い、その顕彰に努めた。郷里佐川に青山文庫、東京に多摩聖蹟記念館、茨城・大洗町に常陽明治記念館などの設立に尽力した。蒐集の遺墨は当館のほか上記各所や早稲田大学図書館、高知県立図書館などに所蔵されている。八十六歳の昭和三年『維新風雲回顧録』を著し、先輩や同志と駆け抜けた激動の時代を振り返っている。光頭の伝記としては熊沢一衛『青山余影』をもとにした沢木健二『伯爵田中青山』がある。

平林盛得(ひらばやしもりとく)／当館専門員

# 作品解説

## 1 高山彦九郎喪中歌草稿 高山彦九郎 一卷

紙本墨書 縦三六・三 長五三〇・二  
天明六(一七八八)年(一七八六)年

彦九郎が、寵愛をうけた祖母の死を悼み、天明六年(一七八八)八月二十四日墓の傍らに喪屋をつくり、三年の間喪に服した。その期間中に彦九郎を中心に縁者や知人の詠じた哀悼歌集「草穂」の原本の断簡である。彦九郎(正之)のほか、叔父正業、姉妹とみ、娘せい・さと、男義介の一族や、源有光、道弘らの名がみえる。第一紙は(八)月十一日に叔父正業と彦九郎(正之)が墓前で三十四首を詠んだものの冒頭の四首で、「哀子正業哀泣」「哀孫正之哀泣」と署名している。第二紙は八月三日の彦九郎の五首の詠で前紙とは連続しない。全十四枚、散逸を防ぐために便宜接続したものと考えられる。また歌集の前に金井鳥洲が描いた彩色の彦九郎の座像をのせる。大刀と冊子を挟んだ風呂敷包を傍らに置き、右手で左の袖をたくし上げ、左手は袴をにぎり、左足首を立て、つり上げた目にたかい鼻、口を横一文字に結んだ風貌は、同志と激論の姿であろう。小さく鳥州の朱印を押す。本書は、遺族剣持家より譲り受け所持していた矢島行康が、明治二十年(一八八七)を献上した。

高山彦九郎(一七四七-一七九三)は江戸後期の勤王家で、奇行おおく、蒲生君平・林子平とともに寛政の三奇人と呼ばれた。上野国新田郡群馬県太田市(旧)の郷土、彦九郎は通称、名は正之、字仲綱。十三歳の時「太平記」を読み自家の先祖が新田義貞の配下につながることを知り、志をたて、学問にはげんだ。十八歳のとき京に遊学、三条大橋の上で皇居を伏し拝み「草莽在野の臣高山正之」と連呼して行人を驚かし、等待院に足利尊氏氏の墓を訪れてその墓をむちつたと伝えられる。河野忍齋に師事し、山崎闇斎の説いた垂加流の尊王思想を学び、諸国を行脚し、水戸では藤田幽谷・立原翠軒ら、仙台で林子平と交わった。その強烈な思想が幕府の忌避するところとなり、九州遊説中、幕吏の追求をうけ、久留米の森嘉膳宅で、所持していた日記・書簡類をやぶりすてて、自刃した。享年四十七歳、墓は久留米市寺町遍照院。

金井鳥洲(一七九六-一八五七)は江戸後期の南画家で志士、上野・鳥村(群馬県佐波郡)の豪農の出身。鳥洲は号、ほか朽木翁、名は時敏・泰、字子修・林学、通称彦兵衛など。春木南湖に画を学び、谷文晁を師友とする。新田義貞の支族という自覚から尊王の志をいだき、高山彦九郎に私淑した。ただ鳥洲が生まれたのは彦九郎が死んだ三年のちである。頼山陽とまじわり、書画を口実にして来訪する志士たちを密かに庇護した。代表作に「月浦探梅図巻」があり、門下に田崎草堂がいる。三男之恭(ゆきやす)も勤王の画家として活躍した。

## 2 夜間鼠鬻画軸因歎 林子平 一幅

紙本墨書 縦五一・二 横二〇・九  
天明七(一七八七)年

林子平作の七言古詩。天明七年(一七八七)初春友人たちと梅見をしたとき、座興に染筆を求められたので、旧作を書いたもの。植物の繊維様のものを利用して褐色の模様を染めた料紙に、貧窮のなかで絵画だけを大切にしていた、その宝物を無情な鼠どもに齧られた怒りと嘆きを諧謔的に詠じている。

林子平(一七三三-一七九三)は江戸後期の海防論者、字平は字、名は友直。幕臣岡村良通の次男で江戸に生まれる。兄嘉膳が仙台藩士となったのに従い仙台にうつる。工藤平助に兄事し、蘭学の桂川甫周らに新知識を学んだ。西洋文化の進歩を知り、内政をととのえ、富国策をとる藩政改革を三度にわたって建言した。また長崎でオランダ人から北方海域におけるロシアの進出を聞き、「三國通覽図説」海国兵談を著して海防に関する世論の喚起につとめた。このことが幕府の嫌うところとなり、版木・製本をともに没収され、兄嘉膳のもとに禁固されることとなる。「親も無し妻無し子無し版木無し 金も無けれど死にたくも無し」と歌い、六無齋と称した。室に籠もり、病を発してやがて没した。享年五十六歳。高山彦九郎・蒲生君平とともに寛政の三奇人といわれた。奇しくも彦九郎と同じ年に没した。

## 3 蒲生君平建白書 蒲生君平 一卷

紙本墨書 縦一九・二 長二八・七  
文化四年(一八〇七)

蒲生君平が北辺の防備について老中松平信明に提出した建白書である。本紙は継ぎ目のない一枚に書かれ、全文五十七行におよんでいる。北辺の対策を述べるとともに、不遇のうちに死んだ林子平の問題についての行業を讃え、その名譽の回復を請願している。また同じものを若年寄水野忠成にも提出している。この建白書の前には山岡鉄舟が題字を、あとに高森碎巖の識語を配して一巻に仕立てている。

蒲生君平(一七六八-一八一三)は江戸後期の学者、下野宇都宮の商家の子として生まれる。君平は字、名は秀実、また秀吾、通称伊三郎、字君威、号修静庵。下野の儒者鈴木石橋に入門、のち黒羽藩に鈴木為蝶軒、水戸藩士藤田幽谷らと交わり、その感化を受けた。天明六年(一七八八)ころ先祖が戦国大名蒲生氏郷の一族であるとの家伝により、蒲生姓を名乗った。寛政二年(一七九〇)高山彦九郎を慕って陸奥に行ったが会うことができず、帰路仙台の林子平を訪ね志を語り合った。北辺の防備を憂え、また歴代天皇の陵墓の荒廃を嘆いた。水戸藩編纂の「大日本史」に欠けている志部の編纂を独力で企て、「山陵志」職官志を完成した。本居宣長と交流し、「山陵志」の序文を送って批評を求めている。また時世改革を論じた「今書(きんしょ)や国防を論じた「不恤懼(ぶじゅう)などの

著作がある。享年四十六歳、墓は東京・谷中臨江寺にある。林子平・高山彦九郎とともに寛政の三奇人といわれたが、他の二人より二十年のちまで生きた。

題字を書いた山岡鉄舟(一八三六-一八八八)は幕末・明治時代の剣客、鉄舟は号、名は高歩(たかゆき)、通称鉄太郎。江戸本所の生まれで幕臣のち明治天皇の侍従。明治維新のさい単身官軍の営所に乗り込み、西郷隆盛と勝海舟の会談を周旋して江戸の町を戦火から救ったことは著名である。享年五十三歳、墓は東京・谷中全生庵。また識語を書いた高森碎巖(一八四七-一九一七)は明治・大正時代の漢学者、名は敏、通称有造、号碎巖、自知斎など。上総総南の生まれ、渡辺華山の高弟山本琴合に南画を学び、儒者服部蘭台から漢学を学んだ。東京・根岸に漢学塾を開いた。

## 4 月雪和歌短冊 本居宣長・本居大平 一幅

紙本(彩色)墨書  
(月)縦三四・七 横五・五 (雪)縦三六・〇 横六・〇  
江戸時代(十九世紀)

国学を大成した本居宣長とその養子本居大平の短冊をならべて一幅の掛幅としたもの。宣長の短冊は上部を藍色、下部を紫の打曇りの料紙に、題を書かず、三日月が入江の芦の間に影を映している情景を詠じている。本歌は歌集「鈴屋集」三に「芦に三日月のいるかた」の詞書とともに収められている。大平の短冊は金箔と金箔で若松・雲・霞などを描いた料紙に、雪と題して、わが家の庭を白く染だした初雪はたぶん梅の花が咲くころまで残ることだろうと詠じている。ともに詠作の年次は不明であるが、両歌は関連するものではなく、二人の行業を偲ぶ縁としてその筆跡を飾ったものであろう。本幅は、昭和三年田中光顕献上のもの。

本居宣長(一七三〇-一八〇〇)は江戸後期の国学者、伊勢松坂の商家の長子として生まれた。号春庵、鈴屋(すずのや)。和歌や学問を好み、家業に適さず、医師となる。傍ら堀景山に漢学を学び、契沖の学問に接し国学を志し、冷泉為村門下の歌人と交わった。宝暦十二年(一七六三)五月二十五日夜、伊勢参宮の途中松坂に宿泊した敬慕する賀茂貞淵に生涯一度の対面をとり、その激励をうけ、のちに「古事記伝」を大成することとなる。書齋を鈴屋と名づけ、研究に疲れると集めた鈴を鳴らして楽しんだという。儒仏を排して古道にかえるべきことを説いた。宣長を慕う門人は五百人をこえ、伊勢ばかりでなく諸国におよび、その広汎な学問は分化して歌学は養子本居大平に、考証学は伴信友に、国学は平田篤胤らに受け継がれた。享年七十二歳、墓は松坂郊外山室山。

本居大平(一七五六-一八三三)は、父稲掛棟隆が宣長の門人であった縁で十三歳で弟子入りし、四十四歳の寛政十一年(一七九九)養子となり、宣長の没後、四十七歳の享和二年(一八〇二)失明していた宣長の長男春庭に代わって本居家を相続した。温厚篤実で人望があり、和歌山藩に出仕し、藩主の信任を得て門人は千人を越えた。号を藤垣内(ふじのかき)と



という。宣長の歌風・所説をひたすら継承して古風、近風の和歌を巧みに詠んだ。家集に新古今集風の『福集集』、古代風の『藤垣内集』がある。享年七十八歳。墓は和歌山市野芝の吹上寺。

## 5 待郭公和歌短冊 高野長英

紙本墨書(打疊他) 縦三五・七 横五・九  
嘉永三年(一八五〇)

高野長英の和歌一首で、橘の密やかに香る夜毎に、ほととぎすの鳴く声をまちわびている。という春の夜の情景を詠んでいる。署名は長英の変名三泊であり、この名の使用は最後の年の夏から冬のはじめのみであるから旧作である。かつて安穩の日に詠んだものを、捕吏の目をのがれる緊迫の日のなかで認めた理由は分からない。三泊名で残る他の作品は知られておらず、その点で貴重であるが、なお検討の余地が残る。本幅は、昭和三年田中光顕献上の内のもの。

高野長英(一八〇四〜五〇)は江戸後期の蘭学者、長英は字、名は謙、変名三泊。伊達家の支藩水沢藩の医家の三男として生まれる。杉田玄伯らに師事し、また長崎の鳴瀬塾でシーボルトから蘭学、医学をまなぶ。尚齒会(一名蚕社)を主催する渡辺華山や小関三英らとまじわり西洋についての研究をふかめ、『夢物語』を著して幕府の対外政策を批判した。天保十年(一八三九)蚕社の獄で永年(一八四八)宇和島藩にとどまったが、翌年八月江戸にもどり、同三年七月、三泊の変名で医業を営んだが、同十月三十日の夜、捕吏におそわれて自殺した。享年四十七歳、墓は岩手県水沢市大安寺。

## 6 大日本図 頼山陽

紙本墨書 縦五八・七 横一一・一八  
文政八年(一八二五)

頼山陽が文政八年(一八二五)、自身の著作の参考資料として描いた日本地図である。従来の地図では歴史書をよむさい役に立たないので、主要な「戦争の事跡」の舞台となる山脈の起伏、河川の源流から水流などを主として描いたとしている。北は松前(蝦夷)、南は大隅(薩摩)まで、また佐渡・壹岐・対馬・平戸・五島の島々を記している。上部に乙西(文政八年)孟秋(七月)十二日の製作理由を記した山陽の識語をもつ。史書『日本外史』完成(文政九年)直前のときである。本幅は、昭和四年昭和天皇が大坂行幸のさい藤田平太郎から献上された。頼山陽(一七八〇〜一八三三)は江戸後期の儒学者、詩人。山陽は号、また三十六峰外史、名は襄(のぼる)、字子成、通称久太郎。芸州藩儒香

水の長男として大坂に生まれ、父に仕がって広島に移る。寛政九年(一七七七)江戸に遊学し尾藤州に師事した。このころから情緒の不安定をあらわし、脱藩したりして、郷里に幽閉され、このことが読書の時間を豊富にし、史書を著述させる機縁となった。備後で菅茶山の塾の塾頭となったのち上洛して開塾した。九州ほか各地を歴訪したが京の地を本拠とした。門弟教育のかたわら、おおくの文人墨客とまじわり、詩文や書画をのこした。著書に史書三部作『日本外史』『日本楽府』『日本政記』、詩集『山陽詩鈔』などがあり、その史観は幕末の尊王攘夷派の志士たちにおおきな影響をあたえた。享年五十三歳、墓は京都・東山長楽寺後山。

## 7 「推倒一世之智勇」行書 藤田東湖

紙本墨書 縦一〇三・九 横二八・七  
江戸時代(十九世紀)

藤田東湖が、中国南宋の儒者陳亮にわが身を重ね合わせたものか、「宋史」儒林、陳亮伝の一節を揮毫したもの。生涯のありつただけの智勇をふりしぼって、万世に残るひろい心をつくる。とある。付属の箱の蓋裏に明治九年の木戸孝允の識語があり、その文に東湖の功績を讃えたあと「其書、氣を以て勝り、工の拙を断論すべきに非ず」としている。

藤田東湖(一八〇六〜五五)は幕末の儒者、水戸藩士、東湖は号、名は彪、字斌卿、通称虎之助。誠之進。年少より文武の修業にはげむ。文政十年(一八二七)家督をつく。史館編輯、同総裁代役にすむ。藩主継嗣問題がおこると徳川斉昭の擁立に奔走した。のち斉昭にしたがい人心の一新、武備充実、政治の刷新を建言し、天保十一年(一八四〇)側用人となり、藩政改革につくした。弘化元年(一八四四)斉昭にしたがって江戸にでたが、斉昭が突如隠居謹慎の処分をうけ、東湖も閉門の身となる。嘉永五年(一八五三)許され、以後東湖と号した。ペリー来航にさいして斉昭が幕政に参与することになったので、江戸に召され、安政元年(一八五四)ふたたび側用人となった。同二年江戸に大地震がおこり、藩邸の宿舎で圧死した。享年五十歳、墓は水戸市松本町常磐共有墓地。

## 8 聞桜賦天覧喜為五絶句 佐久間象山

絹本墨書 横三六・三 長二五・〇  
文久三年(一八六三)頃

佐久間象山が詠んだ詩文「桜賦」が孝明天皇の天覧の栄に浴したことに感激して、その喜びをあらわした漢詩である。「恭しく作る所の桜賦、天覧を蒙るを聞き、栄幸慶喜の至りに勝えず、五絶句を為す」と詞書をのせ、七言絶句を五首つらねている。第一首のなかに「廢錮九年」とみえ、吉田松陰に密航を促した咎による信州松代蟄居がゆるされた文久二年(五十二歳)の末以後の作と思われる、最晩年の二年間の作品と

いうことなるう。『象山先生詩鈔』巻之下におさめられている。書は若年のころ王羲之・献之父子の書をまなび、三十七歳ごろから顔真卿の書を習得したといわれる。また絵にもすぐれた才能を示している。本巻は、象山の義兄勝海舟(妹順子が象山の妻)から、明治二十一年献上された。

佐久間象山(一八一〜六四)は江戸後期の思想家で信州松代藩士。象山は号、名は啓(ひらき)、字子明。佐藤藩にまなび、神田阿玉池に塾をひらき、子弟をおしえ、漢学の修得につとめ、アヘン戦争の情報を知り、海防問題に関心をもち、伊豆華山代官江川太郎左衛門に塾をひらき、黒川良安に蘭学をまなぶ。嘉永四年(一八五二)江戸木挽町に塾をひらき、砲術と儒学を兼修させた。門下に勝海舟・吉田松陰・橋本左内らがいる。同六年ペリーの来航とともに西洋事情探察と国力充実の必要性を説いた。翌安政元年九月吉田松陰のアメリカ密航失敗事件に連座して国元に蟄居を命ぜられ、文久二年(一八六二)十一月まで八年をすこす。元治元年(一八六四)上洛中の将軍家茂に召されて上京。公武合体・開国進取説にたつて一橋慶喜や皇族・公卿の間を奔走中、三条木屋町で尊王攘夷派によって暗殺された。享年五十四歳、墓は京都右京区妙心寺大法院。

## 9 徳川斉昭隷書二行書 徳川斉昭

紙本墨書 縦一一・一 横三六・四  
江戸時代(十九世紀)

徳川斉昭が『論語』(子路篇)によって治世の要諦を揮毫して示したもの。近くにいる者たちが喜びなつき、それを聞いて遠くにいる者たちが集まってくるようになる。というもの。書体は一見して草書・行書と異なるもので、隷書という。今日印鑑などにみられる篆書の装飾性や曲線を整理した形であらわれた書体で、さらにその書写の速度をはやめるために考案されたものが草書となる。能書家であった斉昭は書体の如何にかかわらず染筆したようので、その書は世におおく残されている。本幅は、昭和三年田中光顕献上の内のもの。

徳川斉昭(一八〇〇〜六〇)は水戸藩士、名ははじめ紀教、のち斉昭、幼名敬三郎・虎三郎、字子信、号景山、潜龍閣、諱号烈公。水戸藩主治紀の三男、江戸に生まれ文政十二年(一八二九)に藩主となり、藩内の改革推進に擁立されて民政安定・文武奨励をはかるが、保守門閥派と対立した。おおくの人材を登用し、藩校弘道館をつくって学問を奨励し、医学や西洋兵術の導入にも積極的であった。幕政についてもさまざまな改革を提言したが、反発をも招き、弘化元年(一八四四)幕命で隠退させられる。許されたのちも海防の強化や開国反対をとえ、將軍継嗣問題では七男の慶喜を推して老中井伊直弼と対立した。享年六十一歳、墓は常陸茨城太田瑞龜山。

## 10 夏日同詠二首和歌懐紙 島津斉彬 一幅

紙本墨書(打曇) 縦三六・八 横五〇・六  
江戸時代(十九世紀)

薩摩藩主島津斉彬が歌会で連日五月雨・湖辺一釣舟の出題に応じて詠じたもの。一首目は淀川、二首目は琵琶湖(はのうみ)と名所を詠み込んでいる。歌風も書風もおだやかな伝統的な技法に則ったものである。位階に「左近衛権中將」とみえて、斉彬がこの官位についていたのは藩主になったつぎの年の嘉永五年(一八五二)十二月であるので、さらにその翌年(四十五歳の夏以降の詠歌ということになる。ただし具体的な年次は明らかではない。本幅は、昭和三年田中光顕献上のもの。

島津斉彬(一八〇九〜五八)は江戸後期の大名、名は斉彬、通称又三郎、号惟敬など。薩摩藩主斉興の長男、曾祖父重豪に教育を受け、世子世継時代から英明をうたわれ、弘化三年(一八四六)幕府から外交問題の処理をたくされる。異母弟久光の藩主就任の策謀事件(自由権運動を機に嘉永四年(一八五二)藩主となる。殖産興行・富国強兵に力をそそぎ、西洋技術を積極的にとり入れた。国力の充実を基盤として対等外交を目指した。一橋慶喜を擁立して公武合体を推進したが、大老井伊直弼に阻まれた。鹿児島で兵の訓練中急死した。その抱負はその後の薩摩藩勤王運動の原点となった。享年五十歳、墓は鹿児島市池之上町福昌寺。

## 11 独楽園記 島津久光 一卷

紙本墨書(彩色紙) 縦二五・二 長八八四・五  
天保九年(一八三八)

島津久光が中国宋代の宰相司馬光の作「独楽園記」によつて揮毫したもので、この庭園での楽しみは隠れてひとり密かに楽しむのではなく、何物にもとらわれない、独立独歩の心で、天地にはこれにかわるものがないものである」と記している。出典は『古文真宝』(後集巻四)による。久光もこの境地に憧れたものであろう。「天保九年戊戌季秋(九月)徳洋書」と巻末にみえ、緑・茶・青・朱などの染紙や白の料紙に力強い筆力で執筆している。久光年二十二歳、重富領主となる前の年のときである。本記は、昭和三年田中光顕献上のもの。

島津久光(一八一七〜八七)は斉彬の異母弟、名は忠教・久光など、幼名普之助、字君輝、号双松・徳洋など。薩摩藩主斉興と側室由羅の子。一門島津忠公の養子となり天保十年(一八三九)大隅国重富の領主となる。世継斉彬を退けて久光を藩主としようとしたお由羅騒動もあったが、藩主となった斉彬は久光の意見をよくきいた。急逝した斉彬の遺命により、安政六年(一八五九)久光の子忠義が藩主となったため、久光は国父の尊称を得て藩政の実権をにぎった。文久二年(一八六二)藩兵千余を率いて

上洛、伏見寺田屋での藩内の倒幕過激派を制し、挙藩一致で困難に対処し、公武合体運動をすすめた。同三年ころには行き詰まりをみせ、以降は西郷隆盛・大久保利通らに時局の打開をまかせた。維新後、一時内閣顧問・左大臣をつとめた。享年七十一歳、墓は鹿児島市池之上町福昌寺。

## 12 三条実万像 伝冷泉為恭・(賛)三条実万 一幅

絹本着色 縦六四・九 横三二・〇  
江戸時代(十九世紀)

三条実万の賛を上部に配して、屏風を背に上臈のうえに座した頭巾を被った法体の人物を描いている。実万は安政の大獄に連座して安政六年(一八五九)四月に出家し、同十月没している。実万の賛は「夜明けをしらせて曉ごとくうつつ鉦は、深い夢路にまどろんでいても聞こえてくるだろう」とみえる。新時代の夜明けを待ち望む直前の闇のなかの気持ちをつくみとるのは深読みであろうか。本幅の背には直書きで「三条実万公賛 冷泉為恭画」とある。冷泉為恭は実万と対立した九条尚忠に近侍していたようで、実万との関係は分からない。また描写の様子からは、直ちに為恭筆の伝承を信ずることに問題はあらず。本幅は、昭和三年田中光顕献上のもの。

三条実万(一八〇二〜五九)は幕末攘夷派の公家、名は実万、法名濠空。内大臣公修の第二子として生まれる。尊王攘夷急進派実美の父。安政四年(一八五七)内大臣、翌年辞任、その後も朝議に参与し、朝野の関係を処理し、朝権の回復につとめた。日米通商修好条約の勅許に反対、將軍継嗣に一橋慶喜をおし、佐幕派の関白九条尚忠と対立した。幕府の無断調印、紀州藩主徳川慶福の継嗣決定に反対し、密勅をくだすことを実現、幕府に追われる。同六年五月洛北一乗寺村で出家、同十月病のため没す。享年五十八歳、墓は京都・二尊院。

筆者として伝えられる冷泉為恭(一八三三〜六四)は江戸後期の復古大和絵派の画家、名は為恭、幼名普三、法名心蓮坊光阿、号永恭・松殿・南山隠士など。画家狩野永泰の三男として京に生まれる。幼少のころから学問を好み、絵は家風の狩野派を学んだが大和絵の古風にひかれ、古社寺の古画を写して独自の技法を会得した。みずから冷泉姓を名のり、岡田出羽守の養子と称し、菅原姓を名のる。安政三年関白九条尚忠に近侍して関白直慮預と称し、文久二年(一八六二)近江守の号を得る。古典の模写をのぞいて京所司代酒井忠義に近づいたことから、勤王派の浪人におそわれることになる。はじめ京・上賀茂の神光院にかくれ、紀州粉河寺にのがれ、そこで出家し、さらに堺や大和・永久寺など転々としたが、大和・丹波市で暗殺された。享年四十一歳、墓は大和町田町善福寺。

## 13 蝦夷途上吟和歌 松浦武四郎 一幅

紙本墨書 縦二二五・五 横二九・五

江戸(明治時代)十九世紀

弘と署名し、「蝦夷途上吟」とあるように松浦武四郎の和歌である。武四郎著「北蝦夷余誌」にこの和歌の作られた状況の記述がある。安政三年(一八五六)六月十六日、北蝦夷(サハリン)探査中サツコタンの詠歌である。川のほとりの山のはしに巨岩をみつけその陰を宿とさだめたが、あまりの手軽さにふと一首、月影をたよりに焼けさしの炭で岩にしるした。その夜半から微雨が「しめじめ」と降りだしたので、「桐油、むしろ、ふきの葉」などをかぶって雨をしのぎ、立ったままで粥を喫し出立した、と記している。二十九歳のときである。本幅はその歌を後年揮毫したものであるが、その年次は明らかではない。本幅は、昭和三年田中光顕献上のもの。

松浦武四郎(一八一八〜八八)は江戸時代後期の北方探検家、伊勢国一志郡須川村(三重県一志郡)の郷土松浦桂介の四男。名は弘、幼名竹四郎、のち武四郎、字は子重、号を北海・雲津、雅号多気志楼、十六歳のときから五年間、日本国中を遊歴し、長崎・平戸で僧となり、文桂と称した。長崎の乙名おとな、町役津川文作から北方の急迫した事情を聞き、弘化元年(一八四四)帰郷して還俗、ただちに単身北行を志した。同二年東西蝦夷地(北海道)を、同三年北蝦夷地、嘉永二年(一八四九)千島を探索し、さらに安政二年(一八五五)幕府御雇として蝦夷地御用掛に起用され、同三年から五年にかけて西蝦夷・北蝦夷・東蝦夷を探索した。蝦夷探索は六度におよび、その後市井にあって蝦夷地に関するおおくの著書を刊行した。明治元年(一八六八)五十一歳のとき新政府に起用され、北海道の道・国・郡名の選定をおこなったが、政府のアイヌ政策に同調できず蝦夷地開拓判官の職を辞した。享年七十一歳、墓は東京・染井墓地。

## 14 火技論 高島秋帆 一幅

紙本墨書 縦一三五・五 横五七・四  
文久三年(一八六三)

高島秋帆が銃砲の威力を高らかにのべたもの。兵器のなかで火器がもっとも威力をふるう。古今の水陸いづれの戦いでも、火力をもって攻めるものももっともおおい。兵法でも火力をもって攻撃の補助とするのは賢いという。火器の威力は戦陣のなかでいつまでも変わらない。「癸亥晚春」は文久三年三月、「七秩老人」は七十老人の意、秋帆このとき六十六歳。本幅は、昭和三年田中光顕献上のもの。

高島秋帆(一七九八〜一八六六)は砲術家、幼名糾之丞、名は茂敦、字舜臣、通称四郎太夫・喜平、号秋帆。長崎町年寄の三男、天流流砲術を学び、のち和蘭人から西洋砲術を学び、西洋兵術を修得し、門弟に洋式訓練をおしえる。天保十二年(一八四一)幕府の命により演習をおこない、幕臣江川太郎左衛門らをおしえた。同十三年讒言により投獄され、のち

追放とされる。嘉永六年（一八五三）許されて講武所砲術師範役、武員奉行格などにつき幕府の軍事近代化に寄与した。享年六十九歳、墓は東京・本郷大田寺。

### 15 竜図 江川太郎左衛門

絹本墨画 縦一四・二 横五二・三  
江戸時代（十九世紀）

昇竜の図（「垣菴（印）」の落款を付す。画技に優れ、多くの作品をのこしている。本幅は、昭和三年田中光顕献上のもの。

江川太郎左衛門（一八〇一〜一五五）は幕末の伊豆葦山代官・砲術家、名は英竜、幼名芳次郎、のち邦次郎、通称太郎左衛門、字九淵、号垣庵。伊豆葦山の代官の次男として生まれ、幼少のころから武芸・絵画、書をこのみ、文政元年（一八一八）江戸にて、剣を岡田十松に、書画を市河米庵・谷文晁にまなんだ。天保六年（一八三三）代官職をすぎ、家例の太郎左衛門を名のる。海防問題に注意をはらい、水戸藩抱えの蘭学者や田原藩渡辺華山について西洋事情や砲術をまなぶ。さらに同十二年高島秋帆に西洋砲術の伝授をうけるが、同門に佐久間象山・川路聖謨らがいる。同十四年鉄砲方兼帯となり、葦山に小型反射砲を試作したり、農兵策・国防策を建言した。嘉永六年（一八五三）ペリー来航にさいし品川砲台築造・反射砲築造・大砲鑄造・洋式造船などを指揮する。また入獄した高島秋帆の赦免に尽力した。享年五十五歳、墓は静岡・葦山町本立寺。

### 16 航于米国艦中賦古詩 勝海舟

紙本墨書 縦一三・七 横五八・三  
江戸（明治時代）（十九世紀）

万延元年（一八六〇）日米修好通商条約の批准交換のため、咸臨丸の艦長として初の太平洋を横断を航行するにあたって艦上で詠じた勝海舟の七言古詩である。大意は、「君聞かずや、火船（蒸気船）の雄飛すること数万里」ではじまり、広大な世界を縦横に走る姿を想像上の巨鳥・魚にたとえ、南極に連なる氷山群も、無数に点在する翠の島嶼も、海図を推し、天体を観測して掌のように知りつくす碧眼士とたたえ、ひびとの世はどうしてびくびくして頼り無いか。まことを隠すおおきな疑いはこの可否を誤らせる。栄誉を担って雲波のなかを行く、われわれの修得した海軍の技を誰に示したらよいのか。伯夷（殷末周初の賢人）のような大識者をえ、天下に示してこの技術をこの国の基礎としたい」というもの。『海舟全集』に収められて、原拠には詩題の前に安政六年（一八五九）と冠されている。この年の十一月に派遣がきまり、観光

丸が予定されたが、十二月下旬咸臨丸が決定し、翌年一月十九日浦賀を出帆した（同二月二十六日サンフランシスコ到着、閏三月十九日米国出帆、五月五日浦賀、六日品川沖着）。航海の準備はその前年からの詩作はその時であろう。ただし草書体によって軽快に揮毫している本幅は後年のもの。本幅は、昭和三年田中光顕献上のもの。

勝海舟（一八三三〜一九〇九）は幕臣、名は義邦、のち安芳・麟太郎、通称安房、号海舟・飛川。貧しい旗本の家に生まれる。天保九年（一八五八）十六歳で家督をつぐ。島田虎之助に剣術を習い、弘化二年（一八四五）永井青崖から蘭学を学ぶ。安政元年（一八五四）黒船来航について海防意見書を提出し、翌年蕃書調所創設につとめる。同年海軍伝習生監督として長崎におもむき、オランダ海軍の技術を学んだ。安政六年（一八五九）一月条約の批准交換使節一行の荷物輸送と航海術の実践のため幕府軍艦の派遣がきまり、咸臨丸（はじめ朝陽丸、ついで観光丸）の太平洋横断航海が翌年実現する。文久二年（一八六二）には軍艦奉行並、そのうち次第に昇進して幕府の重要問題に参与する。海軍の育成、征長戦の終結、幕府崩壊時の徳川家の保全、慶喜の助命、江戸城無血引き渡しなどに尽力する。明治新政府に登用され高官となったが、明治八年（一八七五）元老院議員を辞任のちは野にくだり、政治、経済、歴史の著書をあらわす。同二十一年枢密顧問官に任せられた。享年七十七歳、墓は東京・大田区洗足池湖畔。

### 17 雪中鷹図 菊池容斎（賛）戸田蓬軒

絹本墨画 縦九一・七 横三三・一  
江戸時代（十九世紀）

雪を被った松の樹に鷹が小鳥をつかんであたりを睥睨している図。容斎の印を付す。また色紙形の戸田蓬軒の賛は「冬の寒い日蒼鷹（鷹の一種）が小鳥を捕らえてその羽根毛で足を温め、翌朝これを放し、その日は小鳥の飛び去った方向には行かないという。鳥でさえ情けを知るといふのに、何故人は無情であるのか」と詠む。本幅は、昭和三年田中光顕献上のもの。

菊池容斎（一七八八〜一八七八）は幕末・明治時代の画家・幕臣、名は容保、通称量平、号容斎、定脚・雲笠など。幕臣河原家の次男として生まれ、西丸御徒役をつとめ、文政八年（一八二五）致仕し、父の実家菊池家をたてる。幼少のころから書画を好み、文化二年（一八〇五）狩野派の高田田乗に師事し、さらに大和絵と有職故実をまなんだ。文政十年から京畿を漫遊し、名家・古社寺に名品をたずね、わが国古来の忠臣・義士・烈婦など五百余人の伝記に像をつけた「前賢故実」を著した。堀河夜討「土佐日記絵巻」などの作品があり、小堀範音ら近代歴史画家の先駆となった。享年九十一歳、墓は東京・谷中墓地。

戸田蓬軒（一八〇四〜一八五五）は幕末の水戸藩士、名は忠敏、通称亀之

介・銀次郎・忠太夫、号蓬軒・清洲。水戸藩家老戸田家の長男として生まれ、弟に安島帯刀がいる。文化十年（一八一三）家督をつぎ、藩主継嗣問題では徳川斉昭をおし、一時処罰されたが、のち斉昭に用いられ、文政十一年（一八二八）執政となり、弘道館創設・封内検地・海防などに力をそそぎ、藤田東湖とともに斉昭をたすけた。弘化元年（一八四四）斉昭が幕府から処罰されたことに東湖とともに連座し致仕する。嘉永五年（一八五二）ゆるされ、蓬軒と号し、海防掛から安政元年（一八五四）執政に復帰したが、翌年の江戸大地震にあい、江戸藩邸で死亡した。享年五十二歳、墓は水戸市酒門町酒門共有墓地。

### 18 旭日波濤図 岩瀬忠震（賛）林学斎

紙本彩色墨画 縦五五・六 横八二・六  
万延元年（一八六〇）

岩瀬忠震が万延元年（一八六〇）の元日に描いた海原に旭日が昇る図。賛は林学斎であるが、前年の安政六年に死去した父復斎の詩をのせたもの。復斎は忠震の母とおなじく林述斎の子であるとともに、ペリー来航などの外交交渉の第一線にはたらく同志であった。おそらく復斎の遺作の詩によって作画したもので、その詩を嗣子学斎が執筆したものと思われる。海に初めての日が昇って海面すれすれ、雲烟は四方に消えうせ、ただぎらめく波濤のみ、一年三百六十日、このような光景は朝ごとにどれほど目にするか、とあつて、絵の題材そのものである。この時忠震は井伊直弼によって永蟄居の身、しかし条約批准使節の出発の時でもあつた。この絵に忠震はどのような思いをこめたものであつたかは分からない。本幅は、昭和三年田中光顕献上のもの。

岩瀬忠震（一八一八〜一八六〇）は幕末の外交家、名は原、のち忠震（ただなり）、字百里、善鳴、通称篤三郎・修理、号蟠州・陽処・岐雲。旗本設楽家の三男（母は林述斎の娘）に生まれ、岩瀬忠正の養子となる。嘉永四年（一八五三）昌平黌教授となる。安政元年（一八五四）老中阿部正弘に抜擢され品川台場築造や蕃書調所の設立などにあつた。ロシア使節の来航にさいして日露和親条約修正交渉にむかわり、同四年日蘭・日露追加条約に調印した。さらに翌年日米修好通商条約の調印の許可をえるため、老中堀田正睦らと上京したが勅許をえられず、勅許なしの調印をおこなった。さらに外国奉行となり、四国通商条約にも全権として調印した。幕府内では開国論・自由貿易論を主導した。將軍継嗣問題では一橋慶喜派であったため、大老井伊直弼にきらわれ、永蟄居となった。親友に永井尚志があり、椿椿山に画をならし、詩や書をよくした。幕末の三傑のひとつ。享年四十四歳、墓は東京・雑司が谷墓地。

賛を書いている林学斎（一八三三〜一九〇六）は大学頭復斎の男、名は昇、字平卿、号学斎、父のあとをつぎ第十二代大学頭となる。賛の落款にみえる先考（父）は復斎（一八〇〇〜一八五九）、名は、字源中、号復斎。

林家中興の祖述齋の六男で、支族信隆のあとをついだが、嘉永六年(一八五三)宗家をつぎ、大字頭となる。安政二年(一八五五)外国事取調役となり、同六年アメリカ使節の応接など忠震とともに外交のごとにあたる。『通航一覽』『墨夷応接録』などの著作がある。享年六十歳。

19 蓮図 永井尚志

紙本墨画 縦二八・六 横五三・四  
文久二年(一八六二)

高く低く咲き乱れる蓮を描き、暮方の花の香りも風も共に微かで、のきの影がさした葉におく露だけが鮮やかである」と詠じている。本幅は、昭和三年田中光顕献上の内のもの。

永井尚志(一八六九)は三河国額田郡奥殿村の生まれ、名尚志(なおゆき、なおむねともいふ)、通称玄蕃頭、主水正、号介堂。父松平兼尹とは三歳のとき死別。天保十一年(一八四〇)二十五歳で使番永井尚徳の養子となる。老中阿部正弘に抜擢され長崎海軍伝習所監理、勘定奉行を経て安政五年(一八五八)外国奉行となり露英仏各国と通商条約を結ぶ。同六年軍艦奉行に転じたが安政の大獄に連座して免職される。のち二度の幕府の長州攻めの処理、鳥羽伏見に敗戦の幕軍の收拾などにあたり、さうに明治元年(一八六八)の箱館戦争に参加したが降伏、明治政府に登用され元老院権大書記官にいたる。享年七十六歳。墓は東京・荒川本行寺。

20 題太公釣謂図 村田清風

紙本墨書 縦二二・四 横四七・〇  
江戸時代(十九世紀)

中国古代の智将太公望が渭水のほとりで釣りをたれて、文王とめぐり合い天下を平定した故事を描いた図によせて詠んだ七言絶句である。枯れた芦だけが雪におおわれて音もなく、ただ寒々と月明かりがさす深い淵のほとりに釣りする人が、西伯公(文王)の夢を叶えて七十余の城をつりあげる人と誰が知ることができようかと詠じている。清風が幕末の乱世のなかでどのような感慨をこめてのものかは分からない。本幅には詩題がみえないが、『村田清風全集』に題名とともに取められている。本幅は、昭和三年田中光顕献上の内のもの。

村田清風(一七八三〜一八五五)は秋(長州)藩士、名は順次、将之、のち清風、字子則、穆夫、通称亀之助、新左衛門・織部、号松齋・東陽など。萩藩八組藩士中堅の子として生まれ、藩校明倫館で優秀な成績をあげ、兵学や海防問題に関心をもち、文政二年(一八一九)三十七歳で家督をつぎ、次第に昇進して藩政に参与する。天保十一年(一八四〇)江戸当役用談役として財政・民政をたてなおし長州藩天保改革をすすめたが、同十五年反対派の坪井九右衛門らに主導権をゆすった。しかし後継者の周布政之助らの改革におおきな影響をおよぼした。隠退のちは子弟教育に

あたり、また海防山口ほかおおくの海防関係の著書をあらわした。安政二年(一八五五)江戸方内用参与を命じられたが、中風により死去した。享年七十三歳。墓は山口・大津郡三隅町。

21 題武市君所贈竹図言別 久坂玄瑞

紙本墨書 縦六七・五 横二八・五  
文久元年(一八六二)

長州藩志士久坂玄瑞が時勢を論じての別れにさいし、土佐勤王党首領武市半平太から贈られた竹図にたいして、七言絶句を詩作し答礼したものの。別れにあたってありきたりの挨拶はいらない。わたしに竹の絵を描いて無限のこころを贈ってくれた。葉におく白露が、夕陽をそめた風にゆれるのとき、ひとり此君ともいう竹にむかって酒杯をあげる。落款にみえる「言別」はことわくと読み、言葉をあらためていうこと、ここでは別れのことは、「辛酉」は文久元年をさし、「日下」は久坂のいいかえである。この別れから三年後に玄瑞が、そしてその一年後に半平太が、それぞれ自刃する。本幅は、昭和三年田中光顕献上の内のもの。

久坂玄瑞(一八四〇〜一八六四)は幕末の志士、萩藩士、幼名秀三郎、名は誠・通武、義助、字玄瑞・実甫、号秋湖・江月斎など。萩藩医の次男として生まれる。安政元年(一八四四)家督をついだが、尊王の大義を明らかにすることを志す。同三年九州に遊歴し、また吉田松陰に師事し、松陰の妹を妻とし、松下村塾での教育の助けをした。高杉晋作とともに松陰門下の双壁といわれた。同五年江戸にでて蘭学や医学を学び、梁山巖らとまじわり、京の形勢をうかがった。同六年安政の大獄に連座して松陰が処刑されると、かわって松下村塾をうけついで。文久元年(一八四四)公武合体論に反対し、和宮の降嫁を阻止しようとするが失敗。同二年坂本竜馬・吉村虎太郎と武市半平太に書をおくり、野にある志士たちの横断的結合を働きかける。同年御殿山英国公使館焼討ちに伊藤博文らとくわわる。同三年天皇の攘夷親征をくわだてるが、八月十八日の政変によつて形勢逆転、攘夷派の公家の追放、長州藩もそれまでの禁裏守護の任をとかれる。元治元年(一八四四)七月京回復のため長州藩は武力行使を実行、禁門の変をおこす。玄瑞ははじめ実力行使に反対したが、藩論にしたがつてこれにくわわり破れて自刃する。享年二十五歳。墓は京都・東山霊山。

22 山水図(秋景) 武市半平太

紙本淡彩 縦一〇六・〇 横三〇・〇  
江戸時代(十九世紀)

南画風山水図で、下部の崖の上に長い杖を持った人物を配した雄大な構図、落款に「秋山暮靄」とみえる。画技に長じ、

山水画ばかりでなく、美人画や自画像など多くの作品をのこしている。本幅は、昭和三年田中光顕献上の内のもの。

武市半平太(一八二九〜一八五五)は幕末土佐藩の志士、名は小橋、幼名鹿衛、通称半平太、号瑞山・吹山・茗小、など。土佐・長岡郡吹井村の郷士の長男として生まれ、国学者鹿持雅澄の妻が叔母にあたる。幼少のころから和漢の学をならい、小野藩一刀流に入門、さらに南画・日本画を学んだ。安政元年(一八五四)高知に剣術の道場を開いた。同三年江戸にでて一時桃井道場の塾頭をつとめた。安政の大獄・桜田門の変をおしして内外の情勢が混沌となるなかに九州諸藩を歴訪したり、文久元年(一八六二)江戸にでて桂小五郎(木戸孝允)・久坂玄瑞ら薩摩・長州・水戸の諸藩の志士たちとまじわり、土佐藩勤王派を組織化してその首領となり、藩論を尊王攘夷に統一し、藩主を頂点として藩全体の力によって朝権の回復を目指した。藩政を主導する参政吉田東洋におさえられてこれを暗殺、京留守居加役にすまみ、公武合体派・佐幕派へのテロを支援した。しかし前藩主山内容堂に嫌われ、同三年九月取り調べをうけ、一年半囚獄され、慶応元年(一八六五)閏五月十一日切腹を命じられた。享年三十七歳。墓は高知市仁井田。

23 山水図 武市半平太

紙本淡彩 縦二四・五 横二九・五  
嘉永元年(一八四八)

南画風山水図、下部の橋の上に長い杖を持った人物を配している。落款に「嘉永元年冬日」とみえる。本幅は、昭和三年田中光顕献上の内のもの。

24 武市半平太自画像 武市半平太

紙本墨画淡彩 縦五七・五 横三一・〇  
元治元年(一八六四)頃

武市半平太は文久三年(一八六三)に投獄され、二年後の慶応元年に切腹する。この間画才のある半平太は四点の自画像を残していおり、そのうちの一点である。書物を膝元におき、その上で読書している姿を描き、漢詩を付している。年記はみえないが、佐幕派の燕雀どもが時を得てほしいままに振舞っているのに、しら鷹のわが身が暗闇の中に眠っているのはどうしたものか。獄舎に閉じ込められ、ただ天をあおぐのみかとあつて獄中の詠であることが分かる。本幅を入手した田中光顕はその背に「恩師瑞山武市先生獄中自画贊肖像」と書き、別に紙片を添えて、「故アリテ光顕ノ手ニ落ルコトヲ得タリ、趙璧當ナラス、至宝無上」と記している。本幅は、昭和三年田中光顕献上の内のもの。

25 三社和歌短冊 月照 三幅

紙本墨書 (各縦三六・三 横五・九  
江戸時代(十九世紀)

僧月照が伊勢大神宮・石清水八幡宮・春日大社の三社を崇めて詠んだ和歌三首である。古くから伊勢・石清水・賀茂を三社として信仰をあつめたが、春日をいれてかぞえる三社信仰も平安時代末期ごろからしだいに盛んになり、神儒仏の一致思想によって伊勢(正直)・八幡(清浄)・春日(慈悲)の神徳が宣伝された。月照(忍向と署名)の歌は、正直・清浄・慈悲の心を各社そのままに詠じている。詠作の年次は不明である。本幅は、昭和三年田中光顕献上のもの。

月照(一八三丁五八)は幕末の勤王僧。名は宗久、のち久丸、僧名はじめ忍鏡、のち忍向、字月照。大坂の町医の長男、十五歳のとき叔父京清水寺成就院の蔵海について出家し、天保六年(一八三五)二十三歳のとき同院住職となる。安政元年(一八四九)成就院を弟に譲り、諸国を行脚して尊王攘夷を説いた。梅田雲浜、頼三樹三郎らとまじわり、同五年大老井伊直弼の日米修好通商条約締結に反対、はげしい反幕運動につとめた。直弼は志士たちの弾圧を強行し、追われ月照は平野国臣や西郷隆盛らの助けで薩摩に逃れたが、追求きびしく、錦江湾に隆盛とともに入水自殺をおこなった。隆盛は蘇生したが、月照は絶命した。享年四十六歳、墓は鹿児島市南村町南洲寺。近衛家の歌道門下で絵にもすぐれていた。歌集に『落葉塵芥集』詠草があったが、昭和二十年に焼失した。

26 梅田雲浜一行書(十蔵宛) 梅田雲浜 一幅

紙本墨書 縦二二八・五 横三一・〇  
江戸時代(十九世紀)

梅田雲浜が愛唱する詩句の一句を揮毫して、十蔵という者に与えたもの。唐の名詩人王維の『少年行』七言絶句三首のうち一首の終句に、「縦死猶聞俠骨香」(たとえ死んでも、俠客としての骨からたつ芳しい香りをひとは聞くであろう)とある。雲浜は「縦」を「寧」、「俠」を「挾」とする。うろ覚えか、意識しての書きかえかは分からない。十蔵は雲浜の後妻千代子の生家の大和・高田村嶋家の僕で、安政五年(一八五八)ころ高田と雲浜のもとを往復したといわれる。世話になった礼として形見のつもりで与えたものであろう。本幅は、昭和三年田中光顕献上のもの。

梅田雲浜(一八二五〜五九)は幕末の志士、小浜藩士、名はじめ義質(よしたた)、のち定明、通称源次郎、号雲浜、湖南・東鳩。若狭国小浜町藩士矢部家に生まれ、祖父の梅田家をつぐ。藩校に朱子学による崎門学を学び、江戸・京にこの字を研鑽し、天保十四年(一八四三)京の字塾望梅軒の講主となる。善政をして民の苦しみを救えと説き、しばしば

藩政や外寇問題で藩主に建言したので、さらわれて嘉永五年(一八五二)士籍をけずられ学者浪人となる。同六年ペリー来航にさいし江戸にのぼり、同志と対策を協議し、さらに水戸・福井に遊説し、露艦が大坂湾にあらわれると撃退策をたてるが失敗、長州にゆき藩士の奮起をうながした。梁川星巖につく江戸における志士たちの指導者となる。安政三年(一八五二)將軍継嗣問題がおこり、さらに日米通商修好条約問題がおこると、一橋慶喜擁立、勅許反対を推進し、井伊直弼の施策に反対した。安政の大獄がはじまると始めに捕らえられ、江戸におくられ、取り調べの中に病死した。享年四十五歳、墓は東京・浅草海神寺。

27 偶成七言絶句 頼三樹三郎 一幅

紙本墨書 縦二二一・〇 横五〇・六  
江戸時代(十九世紀)

頼山陽の子、三樹三郎自作の詩である。一山紅葉の樹林のなかを縫って流れる溪流に、朝の光が林間を透して射し込む初冬の風景を見事に吟じている。各地に遊説の途中、目にした光景の詩作であろうか。酒を愛した詩人で落款に「三樹醉醇」と署名している。本幅は、昭和三年田中光顕献上のもの。

頼三樹三郎(一八二五〜五九)は幕末の儒者、志士、名は醇、字子厚、子春、通称三樹三郎、三樹八郎、号鴨崖、百城など、儒者山陽の三男。天保十一年(一八四〇)大坂にくだって後藤松陰の塾にはいり、かたわら篠崎小竹に学んだ。同十四年羽倉簡堂につれて江戸にでて昌平坂学問所にはいったが、弘化三年(一八四六)朝廷を軽んずる幕政に反発して、上野寛永寺(弁天堂)の石灯をたおした筈によって退寮させられる。同年蝦夷地(北海道)にわたり、江差で松浦武四郎とあい、書画の会をもよおした。嘉永二年(一八四九)京都にかえり、四方の志士とまじわり、勤王反幕をととなえた。父の旧友梁川星巖や梅田雲浜らと公卿の間を往来、自説をのべた。將軍継嗣問題では一橋慶喜をおし、安政の大獄に連座し、京都六角の獄舎に捕らわれ、江戸に送られ、伝馬町の獄で斬首に処せられ、遺骸は小塚原にすてられた。極刑の理由は「叛逆之四天王」といふ。享年三十五歳、墓は東京・荒川回院と世田谷松陰神社。

28 拝闕詩 吉田松陰 一幅

紙本墨書 縦二二六・六 横五六・九  
安政三年(一八五二)

闕は宮城のことで、嘉永六年(一八五三)吉田松陰が長崎に停泊中のロシヤ船によって密出国しようとして西下の途中、京で御所を遙拝してみずからの感慨を漢詩にたくしたものを。尊崇して一日たりとも思わないことのない神京にきて、今朝御所を拝し、野人(松陰)は悲しみのあまり我をわすれた。山河は

もとのままなのに、御苑は荒れはてて昔の姿ではない。お聞きますれば、優れた徳のそなわつた今上孝明天皇は、誠をつくして天を敬い、民を憐れまれる方で、早朝みずから齋戒され、国難をはらい太平の世を願う祈りを捧げられている。たぐいまれな天子である。ところがいまの公卿たちはのんびりとして時機をのがしている。どうして詔勅をいただいて皇軍を出動させ、皇威を天下に示さないのか。人生は浮草のごときもので定所がない。いつの日にかふたたび輝かしい天子のお姿を拝すことができようかと詠ずる。癸丑は嘉永六年、この詩を作ったときで、丙辰(安政三年)はその三年後に本幅を揮毫したことを示し、二十一回は松陰の号、藤寅は藤原寅次郎の略称である。本幅は、明治十八年十月松陰の弟子でもあった山原有朋邸に明治天皇の行幸があったさい、献上されたもの(明治天皇紀)。

吉田松陰(一八三〇〜五九)は萩藩の思想家、名は矩方、字義卿、通称寅次郎、号松陰、二十一回猛士。萩藩士杉百合之助の次男として萩郊外松本村に生まれる。山鹿流兵学師範吉田大助の養子となる。叔父玉木文之進の教育をうけ、十一歳で藩主毛利敬親に「武教全書」を講じて秀才の誉れをたかくする。嘉永四年(一八五二)江戸にでて西洋兵学を知り、佐久間象山に入門する。同年末から翌年にかけて、藩の許しをえずに水戸から東北、北陸に遊歴したため士籍剥奪の処分をうける。その代わりとして十年間諸国遊学を認められる。同六年ペリー来航を機に佐久間象山にもすめられ海外事情の視察を決議し、長崎に停泊中のロシア船によつて密出国をくわだてたがはたせず、翌安政元年再来のアメリカ船をたよりにしたが拒否される。自首して江戸の獄舎から萩藩の野山獄に収監され、同二年(一八五五)杉家の蟄居の身となる。収監、蟄居中にも学を教え、時勢を論じた。松下村塾を主宰して久坂玄瑞・高杉晋作・伊藤博文・山県有朋などおおくの人材をそだてた。同五年日米修好通商条約を幕府が無断調印したことに激しく反対し、老中暗殺など過激な運動を計画し、ふたたび野山獄に囚われ、のち江戸にうつされ、安政の大獄の梅田雲浜との関連を問われ、処刑された。享年三十歳、墓は東京・世田谷区若林、松陰神社と山口・萩市椿東。

29 啓發録 橋本左内 一幅

紙本墨書 縦一七八・八 横六九・四  
嘉永元年(一八四八) (跋文安政四年(一八五七))

橋本左内が十五歳のときに書いた『啓發録』の原本。本文の前に矢島岬の序文と、後に左内自身がこの手記を十年後に発見したさい加えた跋文を付けている。もと折本ないし冊子本であったものを、その各面の四方の余白を裁つて、全文を一覧できるように一段五面、八段(墨付三十七枚、白紙三枚)に張

り付けて幅仕立てとしたもの。内容は「稚心ヲ去レ」「立志」などの五項目をあげて、幼稚な心を捨て自覚しなければ大義をなすことができないと説く。跋文には古箱のなから自著をみつめて、清書して友人子秉（溝口辰五郎）と弟持卿（橋本綱常）の二人に提示したと、また十年前のこの書を開いてみて、言葉は未熟であるが奮い立つ激情があり、現在のわが身をかえりみて、そして十年後を思うとき不覚にも恥ずかしさで顔が火照ってくる、と記している。本文と跋文の筆致のちがいが、本文の上部に誤字の訂正がみられる点などから手元に残した原本と考えておく。跋文を記した翌年世を去っている。本幅は、昭和三年田中光顕献上の内のもの。

橋本左内（一八三四～五九）は幕末の開明派の志士、名は綱紀、通称左内、号景岳。越前国福井城下の藩医の長男として生まれる。嘉永元年（一八四八）十五歳のとき『啓蒙録』を著し、翌年大坂にて緒方洪庵の塾に蘭方医学を学ぶ。同五年家督を相続し藩医となる。安政元年（一八五四）二十一歳、江戸に遊学し、杉田成卿・戸家静海らに蘭学を学び、また西洋学の知識を深める。藤田東湖・西郷隆盛ら諸藩士と交渉をもつた。積極的開国論をとる。松平慶永の側近として將軍継嗣問題で一橋慶喜を擁立、その実現と日米修好通商条約の勅許を得るため公卿間を奔走したが失敗する。また大老井伊直弼の失脚をねらったが、かえって慶永の謹慎という事態となり投獄され、江戸佐馬町獄舎で刑死した。享年二十六歳、墓は江戸小塚原（荒川区南千住）回向院。著書に『西洋事情書』『昨夢紀事』『再夢紀事』など。

### 30 安島帯刀自画像 安島帯刀 一幅

紙本墨画 縦五三・二 横六三・五  
江戸時代 十九世紀

布衣姿に折烏帽子を着し、小刀を帯し、右手に中啓を持ち、正面を向いて正座した姿の白描の画像である。後に彩色画に仕上げられるための覚えとしたものか、袖に茶、袴に水浅黄・平緒に白と書入れがある。付属の箱蓋に「贈正四位安島帯刀君自筆肖像 田中光顕」と見え、昭和三年田中光顕献上の内のもの。

安島帯刀（一八一～五九）は幕末の水戸藩家老、名は忠興、のち信立通称弥次郎、帯刀、号峨巖。水戸藩家老戸田家の次男として生まれ、兄に戸田蓮軒（忠敬）いる。母の生家安島家を継ぐ。天保十一年（一八四〇）勅定奉行となり、ついで小姓頭取・大番頭となる。藩主徳川斉昭が幕命により致仕、謹慎の処分をうけると、その雪冤運動をおこなったため俸祿をうばわれ禁固に処せられる。のち登用され、藩政改革につとめ、安政五年（一八五八）斉昭がふたたび急度憤の処分をうけ新藩主慶篤となる。家老につき、新主を助けた。この間、幕府の無断条約調印と將軍継嗣問題について、水戸藩に朝廷から密勅がくだされたことに関与したとこ

が疑われ、安政の大獄に連座し、切腹を命じられる。享年四十九歳、墓は水戸市酒門共有墓地。

### 31 藤娘図 宇喜多松庵 一幅

絹本着色 縦一〇〇・〇 横三五・七  
江戸 明治時代 十九世紀

塗り笠を被った裸足の娘が、右肩に藤の花一枝を担いで踊る。本幅は、昭和三年田中光顕献上の内のもの。

宇喜多松庵（？～一八九三）は幕末の志士・画家、名は可成、号松庵、父一。父一は絵を田中納言にまなんだ勤王派の画家で、その気風をうけつぎ朝威回復・攘夷決行の運動に父とともにつとめた。嘉永六年（一八五三）ペリー来航にさいし、父の意向にしたがい長州藩につかえ、安政元年（一八五四）米艦再来航にあたって江戸湾沿岸の地形を絵図に写し、万一のそなえとした。のち父とともに青蓮院宮や三条実方らの公家の家へ出入りして時局を論じた。同五年安政の大獄に連座して父とともに捕らえられ、投獄され、同六年所払いの刑に処せられた。享年不明、墓は京都・上京区蓮光寺。

### 32 吉村虎太郎書状（弟妹宛） 吉村虎太郎 一卷

紙本墨書 縦二六・〇 横一〇〇・五  
文久三年（一八六三）

文久三年（一八六三）風雲急をよめる京の地にあつて、吉村虎太郎が郷里の弟久万弥と妹阿明に宛た書状である。尊王第一の公卿で日夜参殿をゆるめられている姉小路（公知）様が、逆賊におそれれ落命されたとの知らせをうけ、五月二十二日の明け方御殿にまいつた。諸藩志士も集まり、襲撃の次第、これからの方策など、さまざま相談をして帰宅したところ、父上様の御逝去の報をうけた。呆然自失、悲嘆にうちふした。忠をたてるため孝をすてた身、危急存亡の秋に母上のお頼みにも帰国はかなわない。この度は母上様には書状を差し上げない、と記す。親不孝に悩みながら尊王倒幕運動に身を挺している様子がよく知られ、また姉小路公知の暗殺の模様がよくわしく語られており、貴重な史料となっている。この年の八月天誅組の乱をおこして虎太郎自身世を去る。本巻は、昭和三年田中光顕献上の内のもの。

吉村虎太郎（一八三七～六三）は幕末の志士、名は重郷、号黄庵、字は虎太郎（ふつ）寅太郎ともいわれるが確認される自署はすべて虎太郎。土佐国高田郡津野山郷の庄屋の長男として生まれる。十二歳で庄屋となり治績をあげる一方、高知城下で楠山庄助の塾にまなび、間崎哲馬に師事した。文久元年（一八六一）土佐勤王党に参加し、武市平平太の密命を

うけ、長州の久坂玄瑞、九州で平野国臣らにあい、島津久光が上洛するさい勤王攘夷派が拳兵するという情報を知る。この拳兵に参加するため脱藩したが寺田屋騒動がおこり、計画は失敗する。同三年孝明天皇の大和行幸の機会に決起するため藤本鉄石・松本圭堂らと天誅組を結成し幹部となり、八月十七日大和五条の代官所を襲撃して占拠、同二十六日高取城攻撃に失敗、逃れる途中鷲家口で射殺される。享年二十七歳、墓は奈良県吉野郡東吉野村鷲家。

### 33 紙捻製神武必勝論 平野国臣 三冊

紙本墨書 縦三一・四 横二八・七  
文久三年（一八六三）

平野国臣が獄中で筆墨を与えられないため、紙捻（こより）を作つて墨の代わりに文字として、著作としたもの。皮などの混じつた粗い緒紙を台紙として紙捻の文字を貼りつけている。横長の冊子、一面八行、上（二十七枚）・中（二十三枚）・下（十六枚）三冊。下巻の奥に「文久三年上巳（三月三日）稿成」とあり、このとき国臣は文久二年（一八六二）四月二十九日から翌三年三月二十九日まで福岡榎木屋ます（こや）の獄中にあつた。内容は、外夷とわが国を対比して、われに十の不利（不利）があるが、これに対してわれに十の対応があり、さらに十の勝算があるとする。ただちに攘夷を決定して、孝明天皇のもとに公武一体となつて準備すれば外夷の侵攻は防ぎ、こができる」と説いている。本書は、生野の変に破れたさい、同志の農民に遺品として与えたもので、その子孫から内海兵庫県知事の手を通して明治二十年献上された（明治天皇紀）。平野国臣（一八二八～六四）は福岡藩士、通称二郎、次郎、号月蓮舎、友月庵など。安政五年（一八五八）脱藩して上京、西郷隆盛らと交わり、また九州や下関を転々として尊王攘夷の鼓吹につとめた。安政の大獄で追われる月照を助けて薩摩に潜入したが、月照の水死の結末におわり。文久二年（一八六二）薩摩藩尊王攘夷派や真木和泉守と拳兵を企てたが寺田屋騒動がおこり失敗、福岡藩主黒田長溥の行動を諷めようとして福岡藩吏に捕らえられ投獄され（四月）、翌年三月許されるまで獄中生活となる。のち福岡藩に復帰するが、同年八月いわゆる七卿の一人沢宣嘉を迎えて但馬生野の代官所を襲撃、占拠する生野の変をおこす。しかしこの変はわずか三日で失敗におわり、再び捕らえられて投獄され、翌四年新選組の手で処刑された。享年三十七歳。墓所は京都市上京区竹林寺。著作に『尊攘英断録』『回天三策』などがあるが、注目すべきは福岡の獄中の文久二年五月ごろから紙捻を使つて文字をあらわし、著作とすることを考案したことである。それらに『園圃清光歌集』『尽志録』『征寇説』『制蠻礎策』『神武必勝論』などがある。

34 詠錦旗和歌 平野国臣 一幅

絹本墨書 縦三六・二 横三九・〇  
江戸時代(十九世紀)

文久二年(一八二六)四月、孝明天皇を尊崇する国臣が、自著『回天三策』などを天皇に奉呈したころの作。万葉仮名で、天皇の威風を不す錦の旗のもとに従はない民はいらぬはずがないと詠じている。遺稿『旭桜遺芳』に「文久二年四月朝廷にもの上りける時」の詞書とともにみえる。強烈な討幕攘夷論者であるが、和歌・雅楽・漢書・有職故実に通じていた。この和歌を詠じたころ『紙捻製神武必勝論』(展示33)のような紙捻による著作(紙捻製の歌集『囹圄消光』もある)を考案していたことは興味深い。本幅は、昭和三年田中光顕献上の内のもの。

35 詠宝船和歌 伴林光平 一幅

紙本墨書 縦四四・五 横五三・七  
江戸時代(十九世紀)

伴林光平の自作の和歌で、珍宝満載の宝船が早朝おとずれてくるのは、蓬莱山からはるばる泊まりを重ねて来るのであるだろうか」と詠じている。新春の初夢の風習にちなんで詠んだものと思われるが、詠作の年次は不明である。志をはたさず終わった生涯であったが、こうしたのどかな気分の一時もあつたのである。本幅は、昭和三年田中光顕献上の内のもの。

伴林光平(一八一三〜一八四四)は幕末の歌人で国学者、河内国志紀郡(大阪府藤井寺市)の浄土真宗尊光寺に生まれる。名は光平、通称六郎、号瑛鳩隠士など。はじめ僧名を大雲坊周永といひ京都西本願寺で修行、国学者無蓋や本居大平門人飯田秀雄に和学・和歌を学んだ。天保十年(一八三九)還俗して伴林六郎光平と名のつた。のち江戸にて伴信友の門下となるが、兄の懇望により一時僧に戻った。しかし文久元年(一八六〇)ふたたび還俗して奈良中宮寺の家士となる。この間和歌・国学を講じ、歴代天皇の陵墓の荒廃を嘆き(野山の嘆き)その復興を志す。同三年大和国五条に天竺組の変がおこるとこれに参加、軍議方兼記録方となり奮闘したが敗退して捕えらる。奈良の獄中で大和拳兵参加の顛末を記した『南山路雲録』を著した。京都六角獄舎に移され、おなじく収監されていた平野国臣と和歌を贈答したことが知られている。獄中で斬死に処せられた。享年五十二歳。

36 坂本竜馬書状(乙大姉宛) 坂本竜馬 一幅

紙本墨書 縦一五・一 横八〇・九  
文久三年(一八六三)

坂本竜馬が三番目の姉乙女に宛てた書状で、内容から文久三年(一八六三)二十九歳のときのもと考えられる。文面には勝海舟の門下となつて客分格のあつかいをうけていること、神戸海軍操練所の設立に奔走していること、訓練の蒸気船によつて近々土佐へ帰郷するつもりであること、むかし話し合つた寿命のこと(私四十歳という箇所や不審)などにもふれ、竜馬の近況、姉にたいする親密な気持ちやカラ威張りしている様子などが、よく表されている。本幅は、昭和三年田中光顕献上の内のもの。

坂本竜馬(一八三五〜六七)は幕末の志士、名は直隆(なおかげ)、のち直柔(なおなり)、通称竜馬(りょうま)、変名才谷梅太郎。土佐高知の町人郷士の次男として生まれる。十四歳のとき高知城下で日根野弁治から剣術をならひ、のち嘉永六年(一八五三)江戸にて北辰一刀流千葉定吉について免許をうけ、剣士として知られる。江戸滞在中ペリー来航に直面して攘夷思想の影響をうける。文久元年(一八六〇)武市半平太の土佐勤王党にくわり、長州秋の久坂玄瑞とまじわり、藩の現状にあきたらず同年三月二十四日脱藩した。在郷のとき河田小竜から中浜万次郎の漂流談と洋学発展論を聞き共鳴するところがあり、江戸にて勝海舟を知り、その新世界観に感激して門下生となる。勝のもとで航海術をまなび、同三年幕府が神戸海軍操練所の建設をせよと、勝のためにその実現に奔走し、しだいに攘夷論から転向した。元治元年(一八六四)勝の失脚により薩摩藩の保護をうけ、慶応元年(一八六五)長崎に商社(のち海援隊をつくり活動する。同年反目する薩長二藩の同盟を成立させ、同三年土佐の後藤象二郎を説き山内容堂をこきし、將軍慶喜の大政奉還を実現させる。大政奉還の一カ月のち、京都近江屋で中岡慎太郎と会談中おわれ暗殺される。享年三十三歳。墓は京都・東山霊山。

37 西府幽居偶成 中岡慎太郎 一幅

紙本墨書 縦二四・五 横二九・二  
慶応二年(一八六七)

中岡慎太郎が、太宰府に軟禁されている過激攘夷派の五公卿三条美実らに京の動静をしらせに訪れたさい、八方塞がりの現状にふとももらした感慨の詩である。ままよ世の塵芥が四方にみちみちているが、心を無にすればかえつて真情があらわれてくる。どうしてこの神代から人皇につづくこの道をたよりにしないことがあるのか。ただちに全国のみちあふれてる塵芥をひとかけらも残さずかたずけてしまおう。慶応三年二月二十一日の作詩であるが(『行行筆記』)、原典は七言律(十二句)で、本幅はその末の四句を揮毫したもの。慎太郎はこの句が気に入つたらしく同文のものが世に数篇のこざれている。この年の十一月十七日遭難するので慶応三年の染

筆である。本幅は、昭和三年田中光顕献上の内のもの。

中岡慎太郎(一八三八〜六七)は幕末の志士、名は為鎮、のち直正、通称福太郎。のち光次・慎太郎、号迂山・遠山。土佐国安芸郡北川郷の大庄屋の長男として生まれる。間崎哲馬に経史を学び、武市半平太に剣術を習う。文久元年(一八一六)半平太の土佐勤王党に参加し、同三年勤王党弾圧のため脱藩して長州にはいる。以後京と周防三田尻のあいだを往復し、富国強兵・武力討幕の策によつて坂本竜馬・西郷隆盛らと薩長連合のために奔走した。慶応三年(一八六七)脱藩の罪をゆるされ、陸援隊を組織し討幕のために活動したが、京河原町の近江屋で坂本竜馬と会談中、暗殺された。享年三十歳。墓は京都・東山霊山。また高知県安芸郡松林寺。

38 録王守仁詩 高杉晋作 一幅

紙本墨書 縦九五・六 横二八・七  
慶応元年(一八六五)

高杉晋作が近侍する同志田中光顕の依頼におうじて、明の儒者王守仁(号陽明)の詩を染筆してあたえたもの。四十余年を夢のうちに過ごし、いまぼんやりと目覚めたが、すでに日は亭午(正午)を過ぎていく。あわてて高樓にのぼり、撞くべき暁の鐘をついた」というもので、晋作は「王陽明は亭午に暁鐘の鐘を撞いたというが、自分は夕陽に及んでも未だ鐘がつかない」と光顕に語つたという(『維新風雲回顧録』)。なお付属の箱に「慶応元年乙丑ノ秋長州下関ニ於テ田中光顕蔵」とある。本幅は、昭和三年田中光顕献上の内のもの。

高杉晋作(一八三九〜六七)は幕末の志士、萩藩士。名は春風、字鶴夫、通称晋作・東一、号東行・西海一狂生など。萩藩大組士の家の長男として生まれる。安政四年(一八五七)藩校明倫館に学び、また松下村塾に入門、吉田松陰の影響をうけ、久坂玄瑞とともに弟子の双壁といわれた。師松陰の過激な行動を諫めたが聞きいられなかった。江戸にて昌平學に学び、関東・北陸を遊歴して佐久間象山・横井小楠らを知る。文久二年(一八六二)藩主の命をうけ上海にわたり、太平天国の乱や中国の半植民地化の表情を目撃し、日本の危機を痛感し、攘夷運動に挺身する。同年末松陰門下らと品川御殿山の英国公使館焼き討ち事件をおこす。同三年長州藩への米仏軍艦の砲撃に対処するため奇兵隊を組織し、これに對抗した。元治元年(一八六四)四国連合艦隊の下関砲撃事件にも講和条約の正使として活躍した。同年の幕府の第一次征長軍にたいして主戦論を説き、保守派の藩庁対立し、一時脱藩した。慶応元年(一八六五)藩論を統一して、反目していた薩摩と同盟をむすび、全藩を指揮し第二次征長軍にあつたが、病のために没した。享年二十九歳。墓は下関市吉田町清水山。

39 述懐七言絶句扇面 伊藤博文 一幅

紙本墨書 縦一四・八 横四一・〇  
江戸、明治時代(十九世紀)

「眠られぬままに悶々とする。時に傷つき、世を憂えて、涙がとまらない。真夜中の月光のなかにほととぎすが一声、悲しみに悲しみがかさなる」と詠ずる。扇面の末尾に「近作を録す」とあり、詩作時をあまり離れないときに染筆して扇子にしたたものと考えられる。本幅の背に田中光頭の筆で「春(畝)伊藤公七絶」「維新以前於馬関(下関)見示、撫枕沈吟夜不眠」と書いている。詩作時を慶応ころと推定する説がある。本幅は、昭和三年田中光頭献上の内のもの。

伊藤博文(一八四一〜一九〇九)は長州藩志士、明治政府高官、名は幼名利助、のち俊輔、維新以後博文、号春畝、滄浪閣主人など。周防国山口熊毛郡の農民林十蔵の子として生まれる。父が萩藩の中間伊藤家の養子となったので、伊藤姓を名乗る。安政三年(一八五〇)藩命で相模国浦賀警衛に出役のち、来原良蔵に見いだされ、その紹介で松下村塾に学ぶ。高杉晋作・木戸孝允・久坂玄瑞らの影響をうけ、京・江戸・長崎などを往来し、文久二年(一八六二)品川御殿山の英国公使館焼討ちにくわわるなど、尊王攘夷派の志士として活躍した。同年井上馨と英国に留学し開国論者に転換し、翌元治元年長州藩の攘夷断行にたいする四国連合艦隊の報復や薩英戦争などの報を知り帰国、藩の講和使節の通訳としてはたらく。そのち幕府の第一次征長軍との戦い、藩の保守派と争いなどを高杉晋作のもとではたらき、藩論を倒幕で統一する。第二次征長戦にそなえて武器の輸入や他藩との交渉の任にあたった。維新後の新政府のなかで長州藩の少壮官僚の地位をしめ、高官に昇進し藩閥政治を展開した。初代内閣総理大臣。享年六十九歳、墓は東京・品川西大井伊藤家の墓地。

40 諷世俳句 木戸孝允 一幅

紙本墨書 縦一三〇・〇 横三四・二  
明治時代(十九世紀)

維新三傑のひとり木戸孝允の俳句である。この句を揮毫してもらった田中光頭がこの句の意味を尋ねたところ「いいか、桜の下で相撲をとってみたまえ、勝ったものには、花が見えなくて、仰むけにたおれたものが、上向いて花を見るであろう、国事に奔走したのも、そんなものだろう、わかっただか」といったという。この言葉聞いて光頭は「幸いにして生きながらえている私どもの事業としては、国家の犠牲性となって倒れたこれら殉難志士の流風余韻を顕揚することにとつとめねば相成らぬ、と深く考えている。」と記している。光頭の著書『維新風雲回顧録』末尾の記述である。なおこの句は明治二年

二月二十五日に作られたもので、長谷川一忠(景隆、肥後の人)と連れだつて後藤象二郎邸で催されたときのものである(『木戸孝允日記』第一)。本幅の詞書は「長谷川一忠の庭で」「角力」が催されたときと思わせるが、この句を揮毫した孝允の記憶がいでであろう。本幅は、昭和三年田中光頭献上の内のもの。

木戸孝允(一八三三〜七七)は萩藩士、名は孝允、通称小五郎、準一郎、實治、号松菊、木圭など。藩医和昌景の次男として生まれ、藩士桂家の養子となり、のち木戸家を継いだ。嘉永二年(一八四八)吉田松陰の松下村塾にはいり、のち江戸に遊学して剣客商藤弥九郎の門に学び、また造船術・蘭学をも修めた。江戸藩邸有備館の舎長などをとつとめるかたわら反幕府活動をおこない、久坂玄瑞・高杉晋作・勝海舟・坂本龍馬らとまじわる。禁門の變後、藩政の中枢に参画。慶応二年(一八六六)薩摩藩との提携をむすび、討幕出兵に協力した。王政復古ののち、「五箇条の御誓文」の草案起草、版籍奉還・廃藩置縣の実現に参与した。明治以後欧米巡回全権副使、参議、文部卿などを歴任し、宮内省に出仕した。享年四十五歳、墓は京都・東山区豊山。

41 「浴天沸温泉」七言絶句 西郷隆盛 一幅

紙本墨書 縦一三七・三 横六三・二  
江戸、明治時代(十九世紀)

「うすい雲が屋を包んでいつも春の気分。神のわざかわきでる温泉は清くて濁りがない。しずかな山中の奥深いころよさをたれが知り得よう。半開きの窓のしたでのんびりと寝ころべば、桃源郷にあそぶ夢のようだ。」「西郷全集」には本詩をいれて十四首の温泉に関する詩作がある。変転きわまりない一生であったが、無類の温泉好きであったようで、山の湯に疲れをいやす一時もあつたのである。ただし、この詩が詠まれた温泉の場所や時はわからない。同文のものが他にも知られているので、気入りの一首であったものか。本幅は、昭和三年田中光頭献上の内のもの。

西郷隆盛(一八二七〜七七)は明治維新の功臣のひとり、薩摩藩士、名は隆永・隆盛、通称小吉・吉兵衛・吉之助、号止水・南洲。薩摩藩小姓組西郷吉兵衛の長男に生まれる。家が貧しかったため十八歳で那方書役助となり家計をたすけた。一方陽明学を学び、無参禅師について禅を学んだ。安政元年(一八五四)藩主島津斉彬にしたがい江戸にでて側近としてつかえ、藤田東湖や橋本左内らとまじわり、江戸・京間を往復活躍した。將軍継嗣問題で失敗、大老井伊直弼の弾圧や斉彬の病死にあい、絶望して月照と投身自殺をはかったが蘇生し、奄美大島に流される。のち許されて島津久光につかえたが、また久光にさらわれ徳之島・沖永良部島に流された。元治元年(一八六四)許されて上京し、禁門の變・長州征伐に活躍し、坂本龍馬の斡旋により木戸孝允らと薩長連合をむすび、討

幕へとすすむ。維新後、参議として国政にあたり、朝鮮問題に関連して辞職、帰郷して私学校を創設したが、生徒の暴発によって西南戦争となり、城山で自刃した。享年五十二歳、墓は鹿児島浄光明寺。維新の三傑のひとり。

42 述懐和歌 大久保利通 一幅

紙本墨書 縦一七・三 横三〇・五  
明治時代(十九世紀)

維新の三傑のひとり大久保利通の和歌である。「花が散つてしまえば二度と訪れてこない人たちのなかに、花の盛りをめぐる人を、風情を解する人と世間では思っているのだ」と詠む。激動の幕末をくぐりぬけ、維新国家の建設に苦闘している利通のふともらした感慨の一首であろう。利通の詩歌をあつめた『甲東詩歌集』におさめられ、明治九年ころの作と推定されている。本幅は、昭和三年田中光頭献上の内のもの。

大久保利通(一八三〇〜七八)は薩摩藩士、名は利通、通称正助、一蔵・市蔵、号甲東。西郷隆盛と幼少のころより親しかった。はじめ公武合体論をとり、寺田屋騒動・生妻事変・薩英戦争・禁門の變から幕府の第一次長州征伐などをへて西郷隆盛らと反幕府運動へとすすむ。慶応二年(一八六六)長州の木戸孝允らと薩長連合をむすぶ。維新政府樹立に指導的役割をはたしたが、内治優先をとらえ、征韓論の西郷と対立した。西郷下野のあと政府の中心となったが、西郷自刃の翌年東京紀尾井坂で暗殺された。享年四十九歳、墓は東京・青山墓地。

主要参考文献

- 国史大辞典(吉川弘文館)
- 日本史大事典(小学館)
- 明治維新人名辞典(吉川弘文館)
- 人物叢書(吉川弘文館)
- 中公新書(中央公論社)



# 出品目録

〔前期〕 一月十日～二月五日  
〔後期〕 二月七日～三月八日

番号	作品名	作者名	員数	制作年代	サイズ	展示期間
1	高山彦九郎喪中歌草稿	高山彦九郎・(画)金井烏洲	一卷	天明六～八年(一七八六～八八)	縦三六・三 長五三〇・二	全期間
2	夜間鼠鬻画軸因歎	林子平	一幅	天明七年(一七八七)	縦五一・二 横二〇・九	前期
3	蒲生君平建白書	蒲生君平	一卷	文化四年(一八〇七)	縦二九・二 長一二八・七	全期間
4	月雪和歌短冊	本居宣長・本居大平	一幅	江戸時代(十九世紀)	(月)縦三四・七 横五・五 (雪)縦三六・〇 横六・〇	前期
5	待郭公和歌短冊	高野長英	一幅	嘉永三年(一八五〇)	縦三五・七 横五・九	前期
6	大日本図	頼山陽	一幅	文政八年(一八二五)	縦五八・七 横一三一・八	全期間
7	「推倒一世之智勇」行書	藤田東湖	一幅	江戸時代(十九世紀)	縦一〇三・九 横二八・七	前期
8	聞桜賦天覧喜為五絶句	佐久間象山	一卷	文久三年(一八六三)頃	縦三六・三 長一二五・〇	前期
9	徳川斉昭隷書一行書	徳川斉昭	一幅	江戸時代(十九世紀)	縦一一・一 横三六・四	後期
10	夏日同詠二首和歌懐紙	島津斉彬	一幅	江戸時代(十九世紀)	縦三六・八 横五〇・六	前期
11	独樂園記	島津久光	一卷	天保九年(一八三八)	縦二五・二 長八八四・五	全期間
12	三条実万像	伝 冷泉為恭・(賛)三条実万	一幅	江戸時代(十九世紀)	縦六四・九 横三二・〇	後期
13	蝦夷途上吟和歌	松浦武四郎	一幅	江戸～明治時代(十九世紀)	縦一二五・五 横二九・五	前期
14	火技論	高島秋帆	一幅	文久三年(一八六三)	縦一三五・五 横五七・四	後期
15	竜図	江川太郎左衛門	一幅	江戸時代(十九世紀)	縦一一四・二 横五二・三	前期
16	航于米国艦中賦古詩	勝海舟	一幅	江戸～明治時代(十九世紀)	縦一三七・五 横五八・三	全期間
17	雪中鷹図	菊池容斎・(賛)戸田蓬軒	一幅	江戸時代(十九世紀)	縦九一・七 横三三・一	前期
18	旭日波涛図	岩瀬忠震・(賛)林学斎	一幅	万延元年(一八六〇)	縦五五・六 横八二・六	前期
19	蓮図	永井尚志	一幅	文久二年(一八六二)	縦一二八・六 横五三・四	後期
20	題太公釣謂図	村田清風	一幅	江戸時代(十九世紀)	縦一二二・四 横四七・〇	前期

番号	作品名	作者名	員数	制作年代	サイズ	展示期間
21	題武市君所贈竹図言別	久坂玄瑞	一幅	文久元年(一八六一)	縦六七・五 横二八・五	後期
22	山水図(秋景)	武市半平太	一幅	江戸時代(十九世紀)	縦一〇六・〇 横三〇・〇	前期
23	山水図	武市半平太	一幅	嘉永元年(一八四八)	縦一二四・五 横二九・五	後期
24	武市半平太自画像	武市半平太	一幅	元治元年(一八六四)頃	縦五七・五 横・三一〇	前期
25	三社和歌短冊	月照	三幅	江戸時代(十九世紀)	(各)縦三六・三 横五・九	後期
26	梅田雲浜一行書(十蔵宛)	梅田雲浜	一幅	江戸時代(十九世紀)	縦一二八・五 横三一・〇	前期
27	偶成七言絶句	頼三樹三郎	一幅	江戸時代(十九世紀)	縦一三一・〇 横五〇・六	後期
28	拝闕詩	吉田松陰	一幅	安政三年(一八五六)	縦一二六・六 横五六・九	後期
29	啓發録	橋本左内	一幅	嘉永元年(一八四八) (跋文 安政四年(一八五七))	縦一七八・八 横六九・四	全期間
30	安島帯刀自画像	安島帯刀	一幅	江戸時代(十九世紀)	縦五三・二 横六三・五	後期
31	藤娘図	宇喜多松庵	一幅	江戸、明治時代(十九世紀)	縦一〇〇・〇 横三五・七	後期
32	吉村虎太郎書状(弟妹宛)	吉村虎太郎	一卷	文久三年(一八六三)	縦一六・〇 横一〇〇・五	後期
33	紙捻製神武必勝論	平野国臣	三冊	文久三年(一八六三)	縦二二・四 横二八・七	全期間
34	詠錦旗和歌	平野国臣	一幅	江戸時代(十九世紀)	縦三六・二 横三九・〇	前期
35	詠宝船和歌	伴林光平	一幅	江戸時代(十九世紀)	縦四四・五 横五三・七	後期
36	坂本竜馬書状(乙大姉宛)	坂本竜馬	一幅	文久三年(一八六三)	縦一五・一 横八〇・九	全期間
37	西府幽居偶成	中岡慎太郎	一幅	慶応三年(一八六七)	縦一三四・五 横二九・二	前期
38	録王守仁詩	高杉晋作	一幅	慶応元年(一八六五)	縦九五・六 横二八・七	後期
39	述懐七言絶句扇面	伊藤博文	一幅	江戸、明治時代(十九世紀)	縦一四・八 横四一・〇	後期
40	諷世俳句	木戸孝允	一幅	明治時代(十九世紀)	縦一三〇・〇 横三四・二	前期
41	「浴天沸温泉」七言絶句	西郷隆盛	一幅	江戸、明治時代(十九世紀)	縦一三七・三 横六三・二	全期間
42	述懐和歌	大久保利通	一幅	明治時代(十九世紀)	縦一一七・三 横三〇・五	後期

志士たちの書画

三の丸尚蔵館展覧会図録No. 18

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十年一月十日発行

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に<sup>1</sup>出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

志士たちの書画

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 18

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十年一月十日発行

© 1998, Museum of the Imperial Collections

22.  
Autumn landscape  
Takechi Hanpeita  
Edo period, 19th century  
L.106.0, W.30.0
23.  
Landscape  
Takechi Hanpeita, 1848  
L.124.5, W.29.5
24.  
Self portrait  
Takechi Hanpeita, around 1864  
L.57.5, W.31.0
25.  
*Waka* Poems on *tanzaku*  
(poetry cards)  
Gesshō  
Edo period, 19th century  
L.36.3, W.5.9 each
26.  
One line calligraphy (sent to  
Jūzō)  
Umeda Unpin  
Edo period, 19th century  
L.128.5, W.31.0
27.  
Quatrain with seven character  
lines  
Rai Mikisaburō  
Edo period, 19th century  
L.131.0, W.50.6
28.  
Poem  
Yoshida Shōin, 1856  
L.126.6, W.56.9
29.  
Notes of enlightenment  
Hashimoto Sanai, 1848 (postscript dated  
1857)  
L.178.8, W.69.4
30.  
Self portrait  
Ajima Tatewaki  
Edo period, 19th century  
L.53.2, W.63.5
31.  
Young women with wisterias  
Ukita Shōan  
Edo to Meiji period, 19th century  
L.100.0, W.35.7
32.  
Letter  
Yoshimura Toratarō, 1863  
L.16.0, W.100.5
33.  
*Sinbu Hisshōron* (doctrine)  
written with twisted paper  
Hirano Kuniomi, 1863  
L.22.4, W.28.7
34.  
*Waka* poem  
Hirano Kuniomi  
Edo period, 19th century  
L.36.2, W.39.0
35.  
*Waka* poem  
Tomobayashi Mitsuhira  
Edo period, 19th century  
L.44.5, W.53.7
36.  
Letter  
Sakamoto Ryōma, 1863  
L.15.1, W.80.9
37.  
Chinese poem  
Nakaoka Shintarō, 1867  
L.134.5, W.29.2
38.  
Chinese poem  
Takasugi Shinsaku, 1865  
L.95.6, W.28.7
39.  
Quatrain with seven character  
lines on fan shaped paper  
Itō Hirobumi  
Edo to Meiji period, 19th century  
L.14.8, W.41.0
40.  
*Haiku*  
Kido Takayoshi  
Meiji period, 19th century  
L.130.0, W.34.2
41.  
Quatrain with seven character  
lines  
Saigō Takamori  
Edo to Meiji period, 19th century  
L.137.3, W.63.2
42.  
*Waka* poem  
Ōkubo Toshimichi  
Meiji period, 19th century  
L.117.3, W.30.5

# List of Exhibits

1.  
Draft for a poem  
Takayama Hikokurō, painting by Kanai Ushū  
Around 1786-88  
L.36.3, W.530.2
2.  
Poem  
Hayashi Shihei, 1787  
L.51.2, W.20.9
3.  
Petition  
Gamō Kunpei, 1807  
L.29.2, W.128.7
4.  
*Waka* poems on *tanzaku*  
(poetry cards)  
Motoori Norinaga and Motoori Ōhira  
Edo period, 19th century  
L.34.7 ~ 36.0, W.5.5 ~ 6.0
5.  
*Waka* poem on *tanzaku*  
(poetry card)  
Takano Chōei, 1850  
L.35.7, W.5.9
6.  
Map of Japan  
Rai Sanyō, 1825  
L.58.7, W.131.8
7.  
Script calligraphy  
Fujita Tōko  
Edo period, 19th century  
L.103.9, W.28.7
8.  
Poem  
Sakuma Shōzan, around 1863  
L.36.3, W.125.0
9.  
One line calligraphy in *reisho*  
style  
Tokugawa Nariaki  
Edo period, 19th century  
L.111.1, W.36.4
10.  
Two *waka* poems on *kaishi*  
(paper for *waka*)  
Shimazu Nariakira  
Edo period, 19th century  
L.36.8, W.50.6
11.  
Poem  
Shimazu Hisamitsu, 1838  
L.25.2, W.884.5
12.  
Portrait of Sanjō Sanetsumu  
Attributed to Reizei Tameyasu  
Eulogy by Sanjō Sanetsumu  
Edo period, 19th century  
L.64.9, W.32.0
13.  
*Waka* poem  
Matsuura Takeshirō  
Edo to Meiji Period, 19th century  
L.125.5, W.29.5
14.  
Doctrine  
Takashima Shūhan, 1863  
L.135.5, W.57.4
15.  
Dragon  
Egawa Tarōzaemon  
Edo period, 19th century  
L.114.2, W.52.3
16.  
Poem  
Katsu Kaishū  
Edo to Meiji Period, 19th century  
L.137.5, W.58.3
17.  
Hawk in the snow  
Kikuchi Yōsai  
Eulogy by Toda Hōken  
Edo period, 19th century  
L.91.7, W.33.1
18.  
Rising sun and waves  
Iwase Tadanari  
Eulogy by Hayashi Gakusai, 1860  
L.55.6, W.82.6
19.  
Lotus flowers  
Nagai Naoyuki, 1862  
L.128.6, W.53.4
20.  
Title of painting  
Murata Seifū  
Edo period, 19th century  
L.122.4, W.47.0
21.  
Title of painting  
Kusaka Genzui, 1861  
L.67.5, W.28.5

## Forword

In the Edo period, the Tokugawa Shogunate created a system to govern the lords of the fuedal clans throughout the country, who ruled over the people within their territories, and also adopted a policy to isolate the nation from relations with foreign countries. This system continued for about 260 years, but towards the last 100 years, a transition in the economic basis and various other situations occurred to threaten the government system, gradually leading towards the disturbed last days of the Shogunate, which was ended by the Restoration of the Imperial Rule in 1867. In this era of the collapse of the Tokugawa Shogunate, appeared many Imperialists who expressed their thoughts, expounded of the crisis of the era, or sacrificed themselves for their causes.

This exhibition focuses on the period from about 1789 to the end of the Tokugawa Shogunate, selecting works of famous people of this era such as royalists, fuedal lords and vassals of the Shogunate, the court, or scholars, not necessarily with outstanding handwriting. Listening to their voices and reviewing their lives through their handwritten works of calligraphy or paintings, we hope you may spend a moment to think about this period not so long ago, right before the modern era.

January 1998

Museum of the Imperial Collections,  
Sannomaru Shōzōkan  
*(Translated by Hiroko Yokomizo)*

The background of the entire page is a large-scale calligraphic work in cursive script (caoshu). The characters are dark and fluid, with varying line thicknesses and some overlapping strokes. The text is arranged in vertical columns, typical of traditional Chinese calligraphy. The overall style is expressive and dynamic.

Paintings and Calligraphy of Imperialists

January 10 — March 8, 1998

Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan